

---

# GUNHUNTERGIRL

sola

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GUNHUNTERGIRL

### 【Nコード】

N3141Z

### 【作者名】

Sola

### 【あらすじ】

HUNTER×HUNTERの世界に転生トリップした少女チエリッシュがハンターになって原作イベントを極力回避しながら必死に生きる物語です。

主人公は少しトラブルメーカーですのでたまにいろんな騒動に巻き込まれます。

## プロローグ

私は死んだ・・・

私は前世では何の特徴もない普通の女子高生だった。

ちなみに死因は車にはねられそうになった子供をかばっての事故死です。

確かにバトルマンガのようなファンタジーな冒険をしてみたいな！  
とは思ったことはあるけど。

なんで

なんで

危険度満載なHUNTER×HUNTERの世界に転生トリップしてんだろ・・・

まあとりあえず死ぬ気で修行して念を身につけますか。

あ、言い忘れましたけどこの世界での私の名前はチェリッシュ・バートンです。

若輩者ですがよろしくお願いします。

## 1話 水見式（前書き）

チエリッシュは原作のゴンやキルア並の天賦の才を持っています。

## 1話 水見式

ここはパドキアのはずれのとある田舎の港町

その街のはずれの森に4歳くらいの茶髪のポニーテールの一人の少女がいた。

彼女の名はチェリッシュ・バートン

4年前に神のいたずらかこのHUNTER×HUNTERの世界に転生トリップした者である。

「ふー、ようやく纏・練・絶と四五行がまともにできるようになったわ。

ここまでできるのに4年と長かったよ」

少女はここまでの苦勞をしみじみと独り言で語っていた。

まあ、赤ん坊の頃から両親に気づかれないようにしながら瞑想をして精孔を開き、纏・練・絶・凝等と念の修行をしたのだから当然なのだが。(しかも、まだ体が幼いので念の上達に体がついていないためでもある)

「さーで、水見式をやってみますかー。」

チェリツシユが両手を向け水と一枚の葉があるガラスのコップに向  
かって発をすると

「どういふこと・・・？」

水の中に不純物ができて水の色が変化してる・・・」

コップの水の水中には粒のようなものができて、水の色が赤くなっ  
ていった。

「これって、私は得意系統は具現化系と放出系と2つもあるってこ  
とかなー。」

ま、転生者補正ってところかしら

悪いことじゃないしそーいうことにしておこつと

というほづに1人納得した。

「あ、もうこんな時間だ。早く帰らないと父さんに怒られるわ。」

そして、彼女は目にもとまらないスピードで港街へと向かった。

## 2話 ガン・シヨ―（前書き）

たぐさんの感想待っています。

## 2話 ガン・シヨール

私の両親は芸人である。

なんでも昔、父ゲイル＝バートンと母ニナ＝バートンは警察だったらしく銃の腕はかなりのもので優秀だったらしい。

らしいというのは、なんでも警察がマフィアと手を組んだりして、詳しいことは知らないが、二人共世界の黒い部分を知って上司や上層部のやり方に付き合い切れなかったので辞めたそうだ。

今は射撃の特技を生かして凄い早撃ちの曲芸撃ちを駆使したガン・シヨールをして生活している。

そして、今私は父から玩具の銃ではあるが、銃の扱い方を学んでいる。

「うーむ、チェリツシュは上達が早いなー。

さすが俺の娘だ。」

「父さんがやったことを真似ただけよ。」

(おいおい一朝一夕でここまでできるものじゃないだろ……)

父は百発百中での的に当てまくっている私を見て呆れていた。

そんな父が呆れていることを知らないチェリツシュは今後のことを



考えていた。

（ふう、今は原作が始まる10年前で私がハンター試験を受けられる年齢まであと6年

原作メンバー特にヒソカに遭遇したくないから早くとも原作の4年前の283期遅くとも2年前の285期にするべきだわ。この世界は死亡フラグ満載だから慎重に行動してある程度危険をなんとか自衛できるよう強くなるために頑張って修行しないと）

と必死にまじめに銃の特訓をしていた。

そして、夜

「ふー、ようやく練の持続時間は30分かー、  
疲れた・・・

ゴン達はこんなきつついことしてたんだなー、凄いよ」

というふう遊び時間とかの暇さえあれば念の修行をして

それ以外は家の手伝いや銃の修行をする修行一色ハードな生活を送っていた。

### 3話 念銃 前編

銃の訓練を始めて1年たち、チエリツシユは5歳になっていた。

「ふー、当然といえば当然だけど、実弾が入った銃はまだ持たせてくれない。」

実はさつき父に実弾が入った銃を扱わせてほしいと頼んだのだが、父が

「少なくともまだお前には10年早い」と笑いながら言われた。

それで今、ゴム弾やBB弾の銃を使って訓練している。

(それでも子供には危険で持たせるのは早いと思うけど・・・)と考えながら、銃の訓練を始めようとしたら、黒色と銀色が混ざった色のものすごく気になる銃が目に入った。

「ねえ、父さん・・・この銃は？」

「ああ、それはずいぶん古いモデルガンさ。気に入ったのならお前にあげよう。」

その銃を凝で見ると

(いや、その銃はモデルガンなんかじゃないすごい銃だと思うけど、だって神字らしきものが刻んであるし、オーラがバンバン出てるから・・・)

訓練が終わり彼女はいつもの街のはずれの森に来ていた。当然、例の銃は持って来ている。

「さーで、早速試してみますか。」

と言って両手で銃を持ってみると

「すごい、自動的に周が発動してる。

しかも、自分の手足のような感じがする。

とりあえず、一発撃ってみよ。」

そう言いつつ、念の応用技の硬を込めながら銃を目の前の2m位の岩に向けて

ドンッ

と念弾を撃つと

バゴーン

岩が粉々になりました・・・

「・・・あまりこの銃は使わない方がいいかも  
強力すぎるし・・・」

と彼女は半分呆然としていると

ガサガサッ！

「ん、なんだろ・・・」

そして、出てきたのは

「う、嘘、なんでキツネグマが・・・」

よだれを垂らした危険な肉食動物だった。

#### 4話 念銃 後編

「グガアアアアアアアアアアアア」

キツネグマは即座に口を大きく開け涎を滴らせながら襲いかかってきた。

チエリツシユはなんとかそれをかわし体勢を整えたが

(ど、どうしよー、どうしよー)

というふうはまだパニックっていた。

そんな隙をキツネグマは当然ながら見逃すわけもなく追撃してきた。

そして、チエリツシユは

(キ、キアアアアアアア)

と大慌てしながら無意識に反射的に銃をキツネグマに向けて

ズッドオオオオオオオオオオオオ

とてつもなくでかい銃声と破壊音が周辺に響き渡った。

家に無事に帰宅した彼女だったが、

(つ、疲れた・・・)

うう、あのドでかい銃声は街にまで届いたもんだから騒ぎになって、警察や両親には報れないようにするのは大変だった・・・。

心身疲れ切っていた。

ちなみにキツネグマはチェリッシュが放ったあの念弾で跡形もなく消し飛んだらしい。

#### 4話 念銃 後編（後書き）

念銃 波皇

神字が刻まれたオーラを込めることで念弾を撃つことができる念能力者専用の銃

念を知らない人にとってはただの使えない銃なためにいつのまにかモデルガン扱いになってしまったらしい。

能力

念能力者が持つと自動的に周が発動する。（使用者のオーラは消費しない）

使用者がピンチになればなるほど念弾の威力は増幅する。

## 5話 海賊襲撃

念銃を手に入れて、キツネグマのトラブルから3年たち私は8歳になっただ。

今日、両親は仕事で隣町に出かけており私は1人で留守番していた。

銃の訓練は両親のどちらかが一緒じゃないとできないので

(きつーく、自分達がいないうちにゴム弾やBB弾のものでも銃に  
触れないように言われています。)

そのためこういう日は念の修行の方を中心にしています。

「よし、これで凝・隠・周・円・堅・硬・流とだいたい応用技は  
ある程度は習得だね」

念の修行は順調に進み、

円は今のところ20から30mまでできるようになり

最近、堅(練)も1時間以上維持できるようになって

結構、オーラの総量は上がっていた。

それなりに念の修行に慣れていつもどおりに過しているよ・・・

ウーウーとサイレンが町中に響き渡った。

「ん、なんだろ?」

とのんきにしていると



「か、海賊が攻めてきたぞー！」

「なんですとー!!！」

家の外に出ると町中大騒ぎだった。

「警察は何をしてるんだよ？」

「海賊の奇襲でこの街に在留していた警官全員殺されたよ」

「おいおい、襲撃してきた海賊は100人以上いるんだぜ。他の町から軍や警察の応援やハンターが派遣される頃にはこの町は壊滅だぞ」

（うわー、メチャクチャやばい状況だなー。

このままだと間違いなく甚大な被害がでる。

時間的に応援は期待できない。

仕方ない……

私1人で皆にばれないように海賊をつぶしますか……）

## 6話 チェリツシュVS海賊 前編

ガスッ

「ゲエッ」

ドコッ

「ハゲッ」

ビュッ

「ギャッ」

「よしこれで10人」

チェリツシュは港に向かっていった。

とりあえずばれないようにフードで顔を隠しながら、

ここまで絶で気配を消しつつ

次々と海賊を倒していった。

さっきまで騒がしかった港町は住民全員が避難してがらんとしており  
今、この町にいるのはチェリツシュと海賊と逃げ遅れて捕まった人  
質のみである。

「まずは人質の救出から

確か皆海賊船につれて行かれていたわね。」

港 海賊船

「お願い助けて・・・」

「ひいひい」

「うわああああ」

「へへ大漁大漁だぜ」

「こいつら奴隷として高く売れそうですねー。」

「ああ、マフィアにでも高く売りつける予定だ。」

そこには60人ほどの海賊と牢に20人ほどの女・子供が捕らえられていた。

「そつえば船長はどこだ?」

「船長室で酒飲んでいます。」

「まあいい、軍や警察やハンター共が来る前にとつと引き上げようぜ」

長居は無用だ」

「あの一」

「どうした」

「町に向かった連中全員との連絡が取れません。」

「!?!? なにかあったな」

カリーン

「ん・・・」

海賊達は音がした方に目を向けると

そこには街に向かったはずの新入りが突っ立っていた。

「どうした新入り？」

「っ、っええ」

ドサッ

「「「!?!?!」」」

いきなり男は倒れてそこにはフードで顔を隠した小柄な奴が現れた。

## 7話 チェリツシュ VS 海賊 後編

「このチビが、どうやってここまで来たか知らねえが  
ずいぶんふざけたことをしてくれたな。」

「ふん、てめえがいくら強かろうが武装した俺ら60人の敵じゃあ  
ねーよ  
死にやぶげらっあああああああああ  
」

「て、てめえー、野郎共やっちまえー」

3分後

そこには海賊60人の死屍累々の山が出来上がっていた。  
海賊達は銃を撃ちまくってチェリツシュを殺そうとしたが  
あまりのスピードに翻弄されてその隙を突かれ彼女から  
ゴム弾を喰らったり殴られたり蹴られてして全員あつという間に  
何が起こったのかわからないままに意識を飛ばしたのだった。

「ふう、集団の対人戦闘の実践経験は初めてだから  
少々不安だったけど楽勝だったわね。

父さんから護身術学んでおいて良かったわ。  
さて人質の救出に向かいますか。」

ヒュウウウウ

「あれは!?!」

ドコオオオオン

「危ない危ない

まさかいきなりバズーカをぶっ放すなんて」

「てめえかぁー、俺様の部下を皆叩きのめしたのはあそこには全身に鎧を着た男がいた

」

「このクラーク海賊団船長であるクラーク様を怒らせたことを後悔させてやるぜ」

(え、クラーク……)

そしてよく見るとその男の姿はONE PIECEのドン・クリークに  
ものすごく似ていた。

(プツ、なんかやられキャラにしか見えないわ)

「笑っんじゃねええええ (怒)」

「はいはい、とりあえず寝ていて下さいね。」  
そう言っつてクラークを殴るが

ガキン

「へっ?」

「H A H A H A H A H A

ッ

「どうだー、ウーツ鋼でできたこの鎧の凄さは  
てめえの攻撃は何ひとつもおおおつ効かねえな  
さあ死にやがぶれあああああああ

「うるさいです(怒)」

「とりあえず周をかけたゴム弾を喰らわせて秒殺しました。」

こうしてたった1人の少女によって賊は全滅してこの日起きた海賊騒動は解決した。

7話 チェリッシュVS海賊 後編(後書き)

このクラークはまた登場させる予定です。



## 8話 天空闘技場 1

海賊襲撃事件から半年たち、町は平和な日々に戻っていた。

海賊達はガキにやられたとわめいていたが皆は賊の戯言だと思いい誰も信じなかった。

海賊を討伐したのは表向きは警察ということになっている。

私は海賊襲撃された頃は町のはずれの森で遊んでいたと両親にこまかしたからね。

ハンター試験を受けられる年齢まであと1年ちょっとになり私は両親に自分の将来を話していた。

「ハンターになるって、ハンターはどれだけ危険な職業かわかっているのか？」

「そうよ、私達は昔ハンター試験を受けたことがあるけど、とてもやばかったわよ。」

というふうに、メチャクチャ反対されていた。

しかも、今話した通り両親は10年以上前にハンター試験を受けたことがあるらしく、ナビゲータを見つけて本試験にまではたどり着いたのだが、2人共その本試験で大けがを負い落ちたらしい。

(まあ、そんなひどい目にあっただから当然か・・・)

それでも根気よく粘って説得を続けて、両親はようやく折れてくれた。

「はぁー、わかったわ、ただし条件があるわ。」

「条件って?」

「今から1人で天空闘技場に行つて、少なくとも100階クラスを楽勝でクリアできるようになればハンター試験を受けてもいい。」

(天空闘技場かー、修行と金稼ぎには丁度いいや。

まだ、それなりに時間があるしハンター試験に備えて頑張りますか。

)

## 9話 天空闘技場 2

「うう・・・むさいマッチョばかり・・・」

天空闘技場には巨漢・強面・筋肉と加えて

礼儀知らず・野蛮・下品な男達がずらりと並んでいた。

前も後ろもマッチョマッチョマッチョ。

しかも子供それも女がここにいることが非常に珍しいためか、

マッチョな男達は私に好奇心な視線を向けてくるのでかなり精神ダメージがきた。

数時間後

「天空闘技場へようこそ。こちらに必要な事項をお書き下さい」

何時間も並んでようやく到着した受付で、

殺伐とした闘技場とは似合わない受付嬢に一枚の書類を渡され

名前・生年月日に適当に闘技場経験の有無・格闘技歴・格闘スタイルを書いて

書類を渡し、闘技場内に入った。

闘技場内は16のリングがあるかなり広いドームのような空間で、観客席からは主に野太い声での歓声が飛び交っていて

リングの上では鍛え上げられた筋肉の男たちが、

互角にあるいは一方的に戦りあっていた。

「1543番・2011番の方。Eのリングへどうぞ」

「あ、わたしだ。」

「両者リングへ」

（私に対する会場の野次は騒がしいな）

「おいおい、嬢ちゃん。ここは遊び場じゃないんだぜ？

ここにいてはことは大けがしても文句は言えないぜ。」

対戦相手である身長が私の2倍はありそうな巨漢の男は  
そう言ったが私は無視した。

「ここ1階のリングでは入場者のレベルを判断します。制限時間3  
分以内に自らの力を発揮してください。それでは、始め！！」

「さあ、嬢ちゃんくたばぶごおおお」

右ストレートで観客席までブツ飛ばしておきました。

「……………2011番、キミは50階へどうぞ」

「どーも」

（さーて、頑張って修行と金稼ぎしますか。）

## 10話 天空闘技場3

天空闘技場にきて2週間たち私は対戦相手を全員瞬殺して

(ちなみにいつの間にか瞬撃のチェリツシュという異名がついたらしい)

どんだん上の階に上がっていき今私は200階にいた

「よし、200階に着いたしようやくこの銃が使えるわ。」

念銃“波皇”と具現化したガンベルトを装備しながら彼女は上機嫌で言った。

「今回の初の念能力者との戦いに備えて戦闘用の念能力を作ったし準備は万全、ドンと来い。」

チャージ・ガンズ(溜まりゆく弾丸)  
能力

具現化したガンベルトに装着した銃に常にチェリツシュから削り取って吸収した一部のオーラを注ぎ込んでいく。(削られるオーラの吸収力がある程度調整できる)

たくさん注ぎ込めば込むほど撃つことができる念弾の威力や数が増える。

オーラを注ぎ込んだ銃を使用する際は銃に込められたオーラを使うのでチェリツシュ自身にはあまりオーラ消費はない。

ガンベルトを具現化して銃を装着してる間は常にオーラは削られて銃に注ぎ込まれていくので、チェリツシュのオーラに負荷をかけてオーラの総量を上げる効果もある。

普通の銃だとオーラを注ぎ込んで数カ月で限界になり壊れてしまいが、ガンベルトに装着している銃は神字が施されている念銃“波皇”で頑丈なので2・3年はもつ

3日後

「本日の対戦カードはなんとびっくり！ 天空闘技場では珍しい子供のそれも女闘士の登場です！ ここまでまったくの無傷で勝ち上がってまいりました9歳のチェリツシュ選手。この試合から銃を武器に戦うようです。はたして200階ではどんな戦いを見せてくれるのかー!!!？」

そして、対するはグラノ選手！ ここまで3戦して2勝1敗とまずまずの戦績を残しています」

対戦相手のグラノはさっきから私を見て笑っている。

なんかむかつくな（怒）

（よし、徹底的に叩きのめそう）

「始め！」

審判の掛け声と共に、グラノは背負っていた何かを取り出した。

「ふふふふ、君も僕のコレクションの餌食にしてあげるよ。」

そう言つてグラノが出したのは・・・

「女の子のフィギュア人形とマネキン人形・・・  
・・・変態だ。」

「なんだと、僕のコレクションを馬鹿にするな！  
キティちゃん軍団行っけー」

私に襲いかかってきた女の子のフィギュア人形とマネキン人形  
正直言つて皆貞子やパームのような姿をした人形なので  
いろんな意味で気持ち悪い・気味悪い・気色悪いの3拍子である。

「ぶっ壊す・・・」

ドン  
ドン  
ドン  
ドン  
ドン  
ドン  
ドン  
ドン

バカン  
バキャン  
ボコン  
ズカン

バコン  
ベキヨ  
バキツ  
グチャ

「NOOOOOOOOOOOおおおおおおおおおおお  
キティちゃ ん！」

グラノは号泣して叫んだ。

「よ、よくもキティちゃんをー、  
行っけー

スーパードキティちゃ ん」

等身大マネキン人形が突撃してきた

「ぶっ飛べ、バーストブレッド」

とんでもなくでかい念弾をマネキン人形に  
喰らわせて同時にリングの4分の1程を無惨に破壊した。

「キティちゃ・・・ぐへ」

念弾の余波を喰らいオーラが尽きたグラノは気絶した。

「グラノ選手は気絶とみなし、勝者チエリツシュ選手」

(あ、ある意味で疲れたわ・・・)





10話 天空闘技場3 (後書き)

次話からついに原作キャラ登場  
あの男がチエリツシュとバトル

## 11話 天空闘技場4

私が200階に来て半年がたちました。

現在、私は4勝0敗で負けなしなのですが・・・

ちょっと疲れ気味です。

なぜかというと

「なんで・・・

なんで・・・

私の対戦相手は皆、変態や変人ばっかなのー！」

そう彼女のこれまで200階で戦った選手4人は皆ある意味で普通ではなかった。

1戦目は女の子の人形遣いグラノ

2戦目は見た目はどこにでもいるクルトという青年だったのだが実は彼はオカマだった。

3戦目はビグルという男でオーラを熱に変える能力者で性格や能力は問題なかったのだが  
彼はムキツムキな巨漢な男だったのでものすごく暑苦しかった。

4戦目はセクトというヤクザのような格好をした男でグロテスクな虫の大群を操って攻撃してきた。

とりあえず全員バーストブレッドの一撃でぶっ飛ばして半殺しにしました。

「まあ、ヒソカのような狂人よりはマシか・・・

明日の試合やったら家に帰ろ・・・」

そう決心した。

次の日

「お待たせしましたー。4戦連勝中の瞬撃のチェリッシュ選手の入場です。」

( 今回の対戦相手はまともな人でありませうに・・・ )

「対するはここまで負け無し！期待の新人カイト選手だ　　！！」

（え、カイト？

どっかで聞いたことがある名前のような気が・・・）

そして現れたのは

「まさか10歳にも満たない子供しかも女の子と戦うことになるとはな・・・

悪いが勝たせてもらっぞ。」

初の原作キャラそれもカイトとの遭遇でビックリするチェリッシュだった。

## 12話 天空闘技場5

チエリツシュは呆然としていた。

(まさか、こんな所で初の原作キャラ遭遇するなんて・・・  
まあ、この人は原作キャラの中ではかなりまともな方だから  
いいけど)

「おい、大丈夫か？」

「あ、すみません。あなたからすごいオーラを  
感じ取ったので・・・」

(さすがあのジンの弟子なだけのことはあるわ。  
オーラの総量は私の数倍ありそう・・・)

「そうか・・・」

言うておくが俺は相手が子供でも手は抜かないからな。」

「はい、よろしくお願いします。」

「始め！」

両者が飛び出したのは同時であった。

そして、その動きは何れも常軌を逸するレベル。

もし、この場に第3者がいたとして、そのものが一般人であれば、否、相当に鍛えた武術家であっても常識の範囲にとどまるものであったのならば

2人の姿を捕らえることはできなかったであろう。

それができるのはこの2人と同じような非常識の域の達人のみで

2人の速さはそれ程のものであった。

「バーストブレード」

私は念弾を放つ

「ふん」

カイトはそれをかわしたが

「喰らえ」

撃つた念弾の軌道进行操作してずらしてカイトに喰らわせた。

「クリティカル！！ 2ポイント！！チェリッシュュ！！2 - 0！！」

（よしこのまま攻めて攻めて攻めまくる。）

試合開始から20分後

ズドンッ

「キヤアアアア・・・」

彼女の身体は大きく弾き飛ばされ、地面に叩きつけられる

「クリティカル!! 2ポイント!! カイト!! 8 - 2!!」

「なかなかの実力・才能・素質があるよ。お前は  
だがまだまだ実戦経験不足とオーラのコントロールは未熟だな。」

4番と書かれたピエロの銃を持ったカイトはそう言った。

「この、喰らえッ」

ドン

ドン

ドン

ドン

ドン

「そんな単純な攻撃が当たるとでも思っているのか？」

カイトはかわすが

「甘い！」

私はまた撃った念弾の軌道进行操作して少しずらしてカイトに全弾喰  
らわせたのだが、



「同じ手が2度も通用すると思っているのか？」

カイトは念弾を全部撃ち落としてしまった。

「な!？」

「隙ありだ」

ズドンッ

「あぐ・・・」

彼女は場外まで吹っ飛ばされてしまった。

「クリティカル!! 2ポイント!! カイト!! 10 - 2!!」

こうして私は完敗したが、なかなかいい経験になったと思う。

12話 天空闘技場5（後書き）

これで天空闘技場編は終了です。  
次話からハンター試験編になります。

13話 試験準備×出発(前書き)

ハンター試験編スタート

### 13話 試験準備×出発

天空闘技場の修行と金稼ぎは終わり、  
ついでにカイトさんと仲良くなって  
ホームコードの交換をしたりして、

3カ月たち私は10歳になった。

無事、私は両親からハンター試験の受験の許可をもらい  
ハンター試験に備えていると準備のために

新しい2つの念能力を作った。

「よし、できた。」

これでハンター試験や仕事がいぶ楽になるわ。」

具現化された白い鞆とドアを見て彼女は上機嫌で言った。

ホワイティ・バッグ（四次元バッグ）  
能力

ありとあらゆる物を出し入れは1日にそれぞれ10個までなら自由にできる。

（今、この鞆には両親からもらった  
護身用の実弾入りの銃やストックの実弾・ゴム弾・BB弾数百発に  
ライフル・麻醉銃やサバイバル道具や携帯食料等が入っている）

制約

価値が高いものほど出し入れする際に多くオーラを消費する。

フリーダム・ゲート（自由奔放な扉）

自分が行ったことがあるところへ瞬時に移動できる移動用の念能力。

制約

1度でも具現化したドアをセットした所でないといけないと移動でき  
ない。

（今、この能力で行ける場所はパドキアのチェリッシュの  
故郷の港町のはずれと実家のチェリッシュの部屋と天空闘技場だけ  
ある。）

ドアのセットは1日1回1箇所しかできない。

この能力が使えるのは1日4回までである。

試験の登録も終わりハンター試験開始まで  
あと10日の出発前日のある日に

私は両親からナビゲーターのことを教えてもらっていた。

「いい、2択クイズは沈黙してね。」

「ナビゲーターをやっている魔獣の凶狸狐達キシコに大けが負わせないよ  
うにしろよ。」

この説明で分かったと思うが両親が教えてくれているナビゲーター  
さんは

原作でゴン達を案内したキリコ達である。

（というか受験者のふるい落とし方は10年前や今や4年後も全く  
変わっていないじゃん  
少しはやり方を変えればいいのに）

そして、次の日

ハンター志望者が乗る船の甲板から

「じゃー父さん母さん行ってくるねー。」

絶対立派なハンターになるからねー。」

「おう、気を付けてなー」

「無理はしないでね」

私はただ無言で手を振った

その内、港町が見えなくなってそこで他の乗客の声が聞こえた。

「くっくくくっ、立派なハンターか・・・嘗められたモンだな」

甲板に居るガラの悪い人達は笑いながら

「この船だけで十数人のハンター志望者がいる」

「毎年全国からその数十万倍の腕ききがテストに挑んで、選ばれるのはほんの一握り。狙う獲物によっては仲間同士の殺し合いも珍しくねエ職業だ。滅多な事口にするもんじゃねーぜ・・・お嬢ちゃん」

（なんか速攻でやられそうなくらい雑魚・小物的な人達ですね。あとどっかで聞いたことがありそうな会話のような気が・・・まあ、どうでもいいですけど

ん、あの人は原作で登場したゴン達の試験官だった船長さん）

「・・・荒れるな」

船長が呟く

（まあ確か嵐になりそうな天候ですね・・・今の内に船内に入っておきましようか）

## 14話 ドレ港到着×ドキドキ2択クイズ

嵐の夜が明けてチエリツシユは気分転換に看板に出ていた。

「ふー、昨夜はものすごい嵐だったわ。」

海を眺めていると船のスピーカーから船長の声が響いた

『これからさっきの倍近い嵐の中を航行する。命が惜しい奴は今すぐ救命ボートで近くの島まで引き返すこつた』

(受験者達は私以外全員ダウンだから多分・・・)

そして、彼女が予想していた通り

「結局、残った受験生は嬢ちゃんだけか。名を聞こつ」

「チエリツシユといます。」

「お前はなぜハンターになりたいんだ？」

「いろんな所に行って世界を自由に旅したいからです。」

あとトレジャーハンターやモンスターハンター志望ですと答えた。

「おいおい、そんな理由でか

ハンターはそんな甘い職業じゃねーぞ。」



「わかっていますよ。  
それくらいの覚悟はできています。」

船長はしばらく私の目をじーと見つめると

「くつくくつ 迷いのない良い目だ。

気に入ったぜ嬢ちゃん合格だ

嬢ちゃんは俺が責任持って審査会場最寄りの港に  
連れていって行ってやるぞ。」

「本当ですか？

ありがとうございます。」

数日後、無事にドレ港に到着して両親から聞いたのと同じように  
一本杉を目指すのが試験会場への近道だと教えてもらった。

「船長さん、いろいろとありがとうございます。」

「おう試験頑張れよ。」

（両親が受けた10年前や4年後の原作と変わっていなくてよかったですよ

さーて一本杉目指して行きますか。）

数時間後

私はとあるお婆さんと向かい合っていた。

「ドキドキ・・・」

「・・・」

「ドキドキ・・・」

「・・・」

「ドキドキ2択クイーズ！」

（あー、原作知識でわかってはいてもなんか白けるわ・・・）

「お前さん、あの一本杉を目指してんだろ？」

あそこにはこの町を抜けないと絶対に行けないよ。

他からの山道は迷路みたいになっている上に凶暴な魔獣の縄張りだからね。

これから一問だけクイズを出題する。

考える時間は5秒だけ。もし間違えたら、即失格。  
今年のハンター資格取得は諦めな

それでは問題。

お前の母親と妹が悪党に捕まり一人しか助けられない。  
？母親　？妹　どちらを助ける？」

「・・・」

「5・4・3・2・1・0

ぶっ、終了」

「で、この問題の答えは沈黙ですよ？  
だいたいこんなクイズに答えなんかあるわけありませんし  
5秒で答えるって方も無茶ですからね。」

「ああ、その通りさ。  
本当の道はこっちだよ。  
一本道だ。2時間も歩けば頂上に付くよ。  
頑張って立派なハンターになりなよ。」

「ありがとうございます。  
では私はこれで」

（はー、知ってはいたけど・・・キツイクイズだったなあ。）

## 15話 ナビゲーター×試験会場到着

今私はナビゲーターのキリコー家が住む家の前にいる。

「さてと行きますか。」

そう言って家に入ると

「キルキルキルキール」

扉を開けた先にあつたのは床に血を流して倒れている男性。そして魔獣とその魔獣に捕まっている女性がいた。

「キルキルキール」

魔獣は女性を抱えたまま私に襲いかかってきたが

「ていつ」

ゴスッ

速攻で叩きのめした。

「いやー、まさかこんなにあっさりやられるとはねー。」

「とてもルーキーとは信じられないよ。」

無事にキリコ一家に試験会場案内の承諾をもらってなぜか船長さん同様に気に入られて一緒にお茶を飲んで寛いでいた。

「合格だ。君を試験会場まで案内しよう。」

「ありがとうございます。」

数日後、私は今年の試験会場に指定されている街のパラスタに来ていた。

ナビゲーターのキリコ（夫）の案内で町のはずれの客がないバに入った。

「ちょっと待っててくれ」

店に入ったキリコは私にそう言って店員に何かを耳打ちした。

そして、店員に店の奥にある隠し部屋に案内された。

「1万人に一人。ここに辿り着くまでの倍率さ。」

君は新人にしちゃ出来だ。

それじゃ頑張りなよ、ルーキーのお嬢ちゃん。

君なら来年も案内してやるぜ」

そう言ってキリコは店から出て行った。

「よっし、ハンター試験頑張るぞ」

私は気合を入れて試験会場に入った。

## 16話 ハンター試験開始×一次試験

験会場にはすでに軽く100人以上の受験者がいた。

その人達をじーと見ていると私と同じくらいの身長で

頭が豆のようにツルツルした

試験の関係者らしき人<sup>ビンス</sup>が話しかけてきた。

「ハンター試験受験者の方ですね。お名前を教えてくださいませんか？」

「チェリツシュ＝バートンです」

「はい、ではこのプレート<sup>①</sup>を胸に着けておいてくださいね。」

そう言っ<sup>②</sup>て私に435番のプレート<sup>③</sup>を渡して去っていった。

「とりあえず試験が始まるまで壁の方で大人しくしてようかな」

そして移動しようとしたら

「なあ、君は初受験者だろ？」

小太りで四角い鼻の人が話しかけてきた。

「ええ、そうですが。あなたは？」

「ああ、俺はトンパってんだ。よろしくな。」

俺はハンター試験のベテランだから

色々教えてやろうと思っただけ。」

「へー、何を教えてくれるのですか？」

「んー、気を付けなければならぬ受験生とかだな。そつだ、近づきのしるしということで乾杯しないか？」

「いやいいです。おなかを壊したくないので新人漬しのトンパさん」

そう言うとトンパは額に汗を浮かべて去っていった。

（まったく少しは手口を変えればいいのに馬鹿ですね今年のハンター試験は私以外念能力者はいないみたいですしいけますね）

そんなことを考えながら時間をつぶしているといきなりベルが大きく鳴り響いて道着を着た巨漢の男が現れた。

「時間となりました。それでは第283期ハンター試験を開始します。それではみなさんご存知かとは思いますが、最後にもう一度確認致します。このハンター試験では試験中に大怪我を負ったり五体満足ではなくなる、また最悪の場合は死亡する事もあります。それでも受験される覚悟の有る方以外はここから退出してください。」

試験が始まってしまつと、もう後戻りはできません」

誰も退出しないのを確認して



「よし、534名全員参加つと俺は一次試験官担当のゴズマだ。一次試験はいたって簡単」

そう言うと天井にロープがいたるところに出てきた。

「落ちないようにすることだ。それではスタート」

いきなり床が崩れ私はジャンプしてロープをつかんで上にのぼりロープを掴めなかった半分以上の受験者が底に落ちていった

一次試験通過者 196名

## 17話 二次試験×三次試験

一次試験をクリアした私達は一次試験会場と似た二次試験会場であるただ広いだけで何も無い部屋に来ていた。

一次試験通過者全員がそろつと

マフィアのような格好をして顔中に傷がある老人が現れた。

「続けて二次試験を始めるぞ。

わしは二次試験官のヴォルケンじゃ

二次試験はわしの殺気に耐えられたら合格じゃ」

瞬間、世界の音が消えた。

ヴォルケンから発された殺気が一時的に世界を殺したのだ。

「あ……………ああ……………」

「ひ……………」

周囲からつめき声や怯えた声が聞こえてくる。

耐えられなかった受験生は気絶したり

腰が抜けたり、体が震え、歯の音が合わず、失禁してしまったりしていた。

「ま、こんなところかの。  
動ける者についてはきなさい。  
三次試験官の所に案内するわい。」

周りの受験者達はさっきの殺気のせいか  
息が切れているのが大半だったので  
皆ふらふらしながら歩き出した。

私はどうなのかって？

当然、なんともありませんでしたよ。

二次試験通過者 86名

30分後

私達受験生は町のはずれの岩山に来ていた。

「到着、おついていた  
では後は頼んだぞ。」

そして、現れた3次試験官は

「あたしは三次試験官のビスケツトだわさ」

(うわー、カイトさんの時のようにすごい偶然ね  
まさかこの人に会えるとは思わなかったわ。  
偶然って恐ろしいかも)

「三次試験はあんた達に渡したこのリストに書かれた宝石の採掘だ  
わさ

制限時間は1週間それまでにリストに載っている宝石を一種類でい  
いから  
持つてくることそれでは始めるわさ」

「この石はわずかではあるけど  
オーラを発しているのがあるわね。  
うーん、とりあえず円と凝でそれっぽいのを探してみるかな・・・」

そして、円と凝で探し続けて1時間後

「キヤーツ」

「ん、何だろ」

そして、かけつけると

茶髪できれいな十代後半の女性の受験生が熊に襲われていた

「危ない!」

ドンッ

一発で眉間に撃ちこみ熊を撃破しました。

「大丈夫ですか？」

「ええ、おかげで助かったわ。私はレイラ  
あなたは？」

「チェリツシユです」

「チェリツシユちゃんね。

この借りはすぐに返したいけど  
今は手持ちは何もないのよ。」

「出世払いでいいですよ  
では私はこれで」

「ありがとう」

お互い頑張りましょうね」

レイラさんと別れて1時間後

「よし、見つけた。」

そして、そこを掘り出すと虹のような色をした宝石が出てきた。

「よっし、指定されているレインボージュエルをゲット

あとは・・・そこにいる人

隠れていないで出てきてください。」

草むらから棍棒を背負いサングラスをかけたリーゼント頭のガラの悪い男が出てきた。

「ほう、よくわかったな。

その宝石をよこしな

おとなしく渡せば命は助けてやるぜ。

ガハハハハ―」

「お断りします」

「そうか・・・

なら死ねええええ」

リーゼント男は棍棒を手に持って襲いかかってきた。

私はとつさに銃を抜いてリーゼント男の棍棒を破壊した。

「まだやりますか？」

「く、くそ

これでも喰らいな」

男は私にスタングレネードを投げつけた。

バシユウウウウン

周りは音と光に包まれた。

「へへ、隙ありだぜ。  
死にな。嬢ちゃん」

リーゼント男はそう言ってナイフを手に  
チェリツシュを殺そうとしたが

ドン  
ドン  
ドン  
ドン

両手両足に銃弾を喰らって倒れた。

「な、なんで・・・」

「残念でしたね。」

私は気配を探るのは得意なんですよ。

あとあなたに喰らわせた弾は強力な麻酔弾です。

1週間後の試験終了まで寝ていて下さい。」

「ち、ちくしょおお・・・」

（ふー、円が使えなかったらヤバかったかも  
次からは気をつけよう。）

さて今の音で他の受験生が来る前にこの場から離れますか。（

私はリーゼント男の意識がないことを  
確認してすぐに試験官の所に向かった。

「よし、指定された宝石ね。  
435番合格第1号だわさ。

とりあえず三次試験終了まで  
あの飛行船で待機してなさい。」

「ふう、やっと一息つけるわね  
一週間ゆっくり休みますか。」

そう呟きながらチエリッシュは飛行船の中に入って行った。

3次試験通過者 36名



**試験官達のお食事会（前書き）**

今回はおまけ話です

## 試験官達のお食事会

「今年は何人合格するかねー。」

四次試験会場に向かっている飛行船の試験官の部屋で

ビスケット・ヴォルケン・ゴズマの3人の試験官が食事をしていた。

「さあねー、今年の受験生のレベルは並で普通だからの  
多くて10人くらいじゃないかのー」

ゴズマの言い出したことにヴォルケンはのんびりと答える。

「少なくともあの女の子は確実に合格すると思うわ。」

「あの女の子って・・・」

「今回の受験者唯一の念能力者である435番のことですか」

「ええ、念能力者としての強さは中堅ハンター級に匹敵するくらい  
ありそうだし」

「そっぴいえはあの娘が持っていた銃にはかなりの量のオーラが込め  
られていましたね」

「むっ、確かにすごいオーラだったのう」

「あれは多分あの娘は具現化した

ガンベルトの能力で常に自分のオーラを削って銃に

オーラをため込んでいるんでしょうね

まったくまだ10歳なもんだから驚いたわさ  
ふふ・・・、気に入ったわさ  
試験が終わったら弟子にして鍛え上げてみようかしら」

同時刻

私は一緒に二次試験を合格したレイラさんと食事していると

クツシュン

「どうしたのチエリツシュちゃん？」

「うーん、風邪かなー。」

「万全の状態で試験にいどむために  
体調管理に気をつけてね」

最強級のプロハンターに目を付けられたことに  
チエリツシュは知る由もなかった。

## 18話 四次試験×五次試験

私達受験生は四次試験会場である館の前にいた。

そんな私達の前にサングラスをかけたおじさんが現れた。

「俺は四次試験官のモラウだ。」

（また、原作キャラ登場ですか  
マジで凄い偶然ですね・・・）

「四次試験は受験生同士のタイムンだ。」

「タイムン？」

受験生の1人が疑問を浮かべて言った。

「ああ、この箱の中にお前らのプレートナンバーが書いたカードが入っている

俺は今から2枚ずつひいていく。

そして、引いた2枚のカードのナンバーの受験生同士

試合をして勝った方が四次試験通過だ。

じゃさっそく始めるぞ

まずは211番と124番・・・」

1時間後

「次、435番と18番」

(あれ確か18番って・・・)

そして現れた18番の受験生は・・・

「はあ、私の相手はあなたですか  
新人潰しのトンパさん・・・」

「へへ、俺の相手はルーキーのお前さんとは  
ついてるぜ。くくく

お前はここでつぶれてもらっぜ。」

「始め」

「はははははー、

世の中の厳しさってやつを教えてやるぜ」

そうやってトンパはチェリツシュに突進したが、  
彼女の姿が視界から消えてしまった。

「な、いったいどこに・・・グアッ」

チェリツシュは瞬時にトンパの後ろに回り込んで  
首に軽く手刀を喰らわせてトンパを気絶させた。

「435番四次試験合格」

その後、レイラさんも無事に合格して  
四次試験も2人そろって通過した。

四次試験通過者 18名

「ここにいる30名が4次試験通過者だ。

お前ら30名は来年ハンター試験を受ける際には、無条件で試験会場まで案内される。

では五次試験を開始する。全員館の中に入りな。」

なんとなく次の試験の内容を予想したチェリツシュはこっそり隠ではれないようにフリーダム・ゲートをセットしておいた。

受験生全員が館に入ると入口がいきなり閉まって出られなくなってしまう。

そして、モラウの声がスピーカから聞こえた。

「五次試験はいたって単純でその館から72時間以内に脱出することだ。

いたるところに罠が仕掛けてあるから気をつけろよ。では始め」

「ではレイラさん私はこっちのルートで行きますね」

「ええ、チェリツシュちゃんも気を付けてね」

私はレイラさんと別れて周りに受験生がないことを確認して

「やっぱり試験内容は  
なんとなくではあったけど  
勘は当たったようね。さてと・・・」

移動用の念能力フリーダム・ゲートを使用した。

「これでクリアっと  
楽勝だったわね。」

そう言ってドアをくぐると

「うおっ!?!、びっくりしたぜ。まさかお前さん  
珍しい移動用の念を持っていたとはな。」

目の前にモラウがいた。

「これで私は五次試験合格ですよね?」

「ああ、五次試験が終わるまで飛行船の中で待っていてくれ  
あとは最終試験だけだ。がんばれよ。」

「ええ、わかりました。あ、一応言っておきますが  
私の能力のことは・・・」

「ああ、わかっているもちろん他言しないぜ。」

モラウは笑いながらそう言って去って行った。

(ふー、ハンター試験クリアまであと一歩  
最後まで気を抜かずにがんばりますか。)

そして、次の日にレイラさんもクリアして  
無事に2人そろって最終試験である。

五次試験通過者 6名



19話 最終試験(前書き)

あの男が再び登場

## 19話 最終試験

「いよいよ、最終試験ね」

「ええ、そうですね。」

ここまで来たんですから

2人そろって合格しましょうねレイラさん」

「ええ、そうね。チェリツシュちゃん」

今私達6人の受験生と4人の試験官は  
ハンター協会が貸し切っている施設にいた。

「さて、今年のハンター試験は次で最後だ。  
そして最終試験はネテロ会長自らによって行われる。  
では会長どうぞ・・・」

そして、高い下駄を履き  
モヒカンに似た髪形の老人が笑顔で現れた。

「ふむ、さすがここまで残っただけあってなかなかの強者ばかりじ  
やの

紹介された通りワシがハンター協会会長のネテロじゃ。  
最終試験はわしらが用意した敵を倒すことじゃ  
ちなみに用意した敵とは  
死刑囚や危険指定されている魔獣・猛獣じゃから  
死なないうつ気を付けるように

ではさっそく始めるとするかの。」

そして、1人1人試験されていき

レイラさんはグレイトスタンプ5匹に苦戦ながらも  
なんとか勝利して合格して

他の4人の受験者は

2人落ちて2人合格して

最後になっていた私の順番がきた。

「頑張つてね。チエリツシュちゃん」

「大丈夫ですよ。レイラさん。

絶対対勝ちますので」

そして、現れた私の相手は・・・

「では最後の受験生の試験を始める

お主の相手は懲役190年の死刑囚のクラークじゃ」

昔ぶっ飛ばした鎧男だった。

「くくくくく、嬢ちゃんが俺の相手かい  
ラッキーだな俺は」

「本ツ当に偶然って恐ろしいですね」

「何のことだよ。ん、その声は・・・  
ま、まさかてめえあの時の・・・」

「ん、知り合いか？」

「あ、はい。こいつは海賊で

昔、私の故郷に100人以上の部下を引き連れて  
襲撃をしてくましてその際に私がこいつら  
を叩きのめしたんですよ。」

詳しい事情を話すとネテロ会長とモラウは  
なんか面白いものでも見つけたという顔になり笑っていた。

「ふむ、面白い試合になりそうじゃの  
それでは始め」

「H A H A H A H A H A ツ  
お前が相手とは俺はマジで運がいいぜ。  
いくぜー」

そう言っつてクラークは殴りかかってきた。

私はパンチを冷静に避けて

脇腹に軽く手加減した正拳突きを叩き込んだ。

「ぐばああああああ」

クラークは吹っ飛び壁にたたきつけられた。

「ぐ、やるじゃねえか・・・」

がすぐに立ち上がった

「意外とタフですね。」

「ふん、俺はてめえにやられてから  
監獄で鍛えに鍛えに鍛えに鍛えに鍛えまくったんだよ。  
最強の俺に敗北の汚点を付けた  
てめえにリベンジするためになあ」

「すごい執念ですね・・・」

「ふんっ」

クラークが体に力を入れると服が破れて  
凄い筋肉が出てきた。

「見ろ、この鍛えに鍛えまくった筋肉を  
この圧倒的な力でぶちのめしてやるぜ。  
おら~~~~~」

そう言っつてクラークはチェリッシュに殴りかかったが

ドンッ

ドンッ

ドンッ

「ぐあああああっ」

「うるさい・うるさい・暑苦しいです(怒)」

麻酔弾を喰らわせて黙らせました。

そして、さすがにもうクラークは立ち上がることはなかった。

「そこまで435番チエリツシユハンター試験合格じゃ」

ネテロ会長とモラウが面白いのが見れたと笑いながら私の合格宣言をした。

こうして私はハンター試験を合格してプロハンターになった。

283期 ハンター試験 合格者4名

## 20話 ハンター試験終了

最終試験が終わり合格者4人を乗せた車はハンター協会本部ビルに入り、

ハンターとハンター証についての講義が開始された。

ハンター免許証の効力や特権、

カード紛失の注意や協会の規約等の説明が終わり

私達4人はハンター証を授与された。

「さて、以上で説明を終わります。あとはあなた方次第です。試験を乗り越えて、自身の力を信じて、夢に向かって前進して下さい。ここにいる4名を、新しくハンターとして認定いたします！」

78

「さて家に帰りますか。」

ホワイティバッグにハンター証を入れて

無事試験を合格して帰ろうとすると

「おい、チェリツシユさん」

トレジャーハンターのような格好をした男が話しかけてきた。

「なんですかカールさん」

この人はカールといい私と一緒に試験に合格した同期生である。

「僕とホームコードの交換をしたいんだけどいいかな？」

「ええ、構いませんよ」

「私達もいいかしら」

「俺も俺も」

カールさんと話しているとレイラさんと豪快そうな青年の2人も話しかけてきた。

この2人も私と同じように試験を合格した同期生である。

「あ、レイラさんとゴグさん

ええ、いいですよ。」

そして、4人でホームコードの交換を終えて

「じゃーね、縁があつたらどこかで会いましょう。」

チエリツシュちゃん3次試験での恩はいつか返すわ」

「俺は何でも屋やってから、なんか困ったことや頼みがあつたらできる限りではあるが格安で請け負うから俺に連絡してくれよ」

「僕は美食ハンターしながらレストラン開業する予定だから良かったら皆食べに来てね。」

「では皆さんまたどこかで会いましょうね。」



私は3人と別れた。

（ふう、良い人達だったな

ゴンがキルアやクラピカやレオリオと友達になった時も  
こんな気持ちだったんだろうなー）

そんなことを考えながらハンター協会から出ようとする

「ちよつと、待ちなさい」

「はい？」

今度はなんだと思い振り返ると

三次試験官であったプロハンターのビスケットさんが目の前にいた

「あなた、念はそれなりのレベルのようだけど  
独学で鍛えたでしょ？」

「は、はいそうですが」

（そ、それを見抜くとはさすがハンター歴40年のベテランハンター  
後にゴンとキルアの師匠になるだけのことはあるわ）

「よし、私が直々にあなたを鍛えてあげるわ。

感謝しなさいよ。この私にタダで念の指導してもらえるんだから」

「はい……？」

(な、なんでもいじやう・・・)

## 21話 ビスケット「クルーガ」の逆鱗

ハンター試験から3ヶ月後

ヨルビアン大陸の東の奥地

「数字の5!!」

「うむ、だいぶ凝が反射的に体についたようね」

現在、私はダブルの宝石ハンターのビスケットさんの指導のもとでG I編のゴン達にやらせたのと似たようなすごく厳しい修行をしていた。

「さて、私は今から宝石とかの買い物に行くから  
チェリツシュあなたも同行して手伝いなさい。」

あ、あとあなたのホワイティバッグで荷物運びお願いね」

弟子入りしてからこの3ヶ月間、私はビスケ師匠に修行だけではなく荷物運びとかの雑用もやらされていた。

まあ、速攻でフリーダム・ゲートとホワイティバッグの能力がばれて2つともかなり便利な能力だから当然なんだけど・・・

師匠いわくあなた応用性が高い能力ばかりだからいいわねという高評価ももらったから悪いことばかりではなかったし

それに師匠と一緒に各地を旅してまわったから  
ずいぶんとフリーダム・ゲートで行ける所も増えたしね。

「何やってるの  
早く行くわよ」

「あ、はい」

1時間後 とある街の宝石商

「なんですって、注文した宝石は盗まれたですってー」

「も、申し訳ございません」

昨日、最近この辺りの宝石・貴金属を荒らしている盗賊の襲撃で  
全部盗まれてしまったんです。」

「フフフフフフフフ」

(し、師匠からどす黒いオーラが！)

「師匠、落ち着いてください。」

「私の大事な大事な宝石に手を出してタダで済むと思うなよ。  
フフフフフ」

(だ、だめだ。こうなったら誰にも師匠は止められない)

「あ、あなたは正気ですか。あの盗賊団には3000万の賞金がかかっていて

先月もアマチュアとはいえ討伐に来たハンター達が  
返り討ちにあっているほど危険な奴らなんですよ」

「大丈夫ですよ。無茶はしませんから  
フフフフ」

(いや、むしろ心配なのは盗賊達の方ですね)

私は盗賊にちよっと同情した。

「さあ、チエリツシュ盗賊討伐に行くわさ  
フフフフ」

(こ、怖すぎですよ。師匠)

その後、盗賊団全員がとあるプロハンターによって半殺しいや全殺  
しにされて

警察に引き渡されて完全壊滅した。

あと捕らえられた盗賊達は全員があんな目にあうくらいなら一生監  
獄暮らした方がマシだと言っていたそうである。

ついでにそんな恐ろしいことをやったビスケ師匠は  
盗賊から手に入れた宝石や懸賞金3000万ゲットでホクホク顔に

なっていた。

そして、私は師匠を絶っ対に怒らせないようにしよつと強く誓つたことにした。

21話 ビスケット「クルーガの逆鱗（後書き）」

ビスケ怖えええ

## 22話 復讐

「てめえには死んでもらうぜ」

今、私は銃やナイフを持った連中に囲まれていた。

どうしてこんなことに・・・

それを説明するには時を少し遡る

1時間前

「ふー、やっと到着しましたね」

「とつとと宿をとって温泉に入りたいわさ  
ほら、行くわよ」

「あ、待って下さいよ、師匠〜」

私と師匠は美容目的で

アイジエン大陸の温泉で有名な町に来ていた。

ここ最近、私は修行や仕事ばかりの生活だったので



温泉はずいぶん楽しみだった。

薬草の温泉で有名な宿にハンター証で宿泊登録していると

受付のお姉さんが注意を説明して来た

「お客様、夜の外出はできるだけ気を付けておいて下さいね」

「ん、どうしてわざ？」

「観光客を狙うろくでもない人がたくさんいるんですよ。

まあ、ハンターであるお客様は大丈夫だと思いますが」

部屋に案内されて寛いでいるとビスケ師匠は呟いた

「そつえば、前に来た時は本当に面倒だったわさ」

「え、師匠はここに来たことがあるんですか？」

「ええ、夜この町を歩いていたらナンパやスリや強盗に遭遇して  
全員返り討ちにしたんだけど復讐に仲間引き連れて懲りずにまたや  
って来て

とりあえず完膚無きに叩きのめしたわさ」

ははは、と私は少し引きつった顔で笑った

(まあ、昼間に外出して夜は外に出なければ何の問題もないかな。)  
と私は楽観視してしまったのがいけなかった。

「おい、聞いてんのか。クソガキ」

暇つぶしに外を散歩しているといかにも悪人ですという人達100人以上に  
からまれた。

「あのー、死んでもらうって私があなた達に恨まれる  
ようなことをした覚えがないんですが・・・」

「恨んでいるのはてめえじゃねえ  
てめえと一緒にいたあのクソ女だよ」

「え、師匠を恨んでいる」

「ああ、俺達は数年前にあの女にボコボコにされたんだよ。  
完膚無きにな。」

「ならなんで師匠を直接狙わないんですか？」

「……俺達は数年前に町中のメンツを集めてあのクソ女を潰そうとしたが返り討ちにされたんだよだから、あのクソ女の強さはよくわかってる。だから、弟子のてめえを人質にするのさ。憎きあのクソ女を殺すためにな。」

「くく、またこの町に来てくれて良かったぜ。おかげで復讐できる。」

「あのクソ女を始末したらてめえも後を追わせてやるよ。」

「今こそ俺達に全治半年の重傷を負わせ監獄でくさい飯を食わせられた恨みを晴らす時だぜ」

(……ちょ、ちょっとー師匠、あなたのせいで私は厄介なことに巻き込まれているんですけど)

「あー、思い出しただけで腹立って来たぜ。というわけでおとなしく捕まぶごおおー!!」

顔を真っ赤にして殴りかかってきたのでカウンターで殴り飛ばしてしまった。

「あ、すみません、つい反射的に……」

「て、てめえぶつ殺す!!」

「あの化け物女の弟子なんだ気をつける!!」

「町中の仲間を呼べー」

徹底的に潰してやる」

「ひええええ、状況が悪化した　！！！」

「野郎共かかれー」

「はあ、仕方ない。戦いますか・・・」

200人以上ものチンピラを片づけ  
私は疲れ切った顔で宿に帰った。

「ずいぶん遅かったわね。

遊ぶのはほどほどにきなさいよ」

「いや、師匠のせいで面倒事にあっただんですが・・・」

なお余談であるが

この一件以降この町でスリや強盗等の犯罪が激減したそうである。

23話 プロハンター達のお食事会(前書き)

あの美食ハンター2人&あの心源流師範登場

### 23話 プロハンター達のお食事会

「食事会？」

「はい、さっき電話で招待されて

私と一緒にハンター試験を合格した同期生のカールさんがレストランを開業

したそうでその記念にパーティを開くことにしたんですよ。」

「あー、そういえばいたわね。

そんなやつが・・・。」

「というわけで師匠も行きませんか？」

「ふむ、今は暇だし丁度いいわね。」

「カールさんの知り合いの美食ハンター達が採った食材を使った料理らしいですよ。」

「それは期待できそうだなさ」

「ずいぶんと立派なレストランね」

「うわー、おいしそうないにおいが充満しています」

「あ、そうだ。言い忘れましたけど  
他の同期生の皆さんも師匠のプロハンターを連れて来ているそう  
ですよ。」

「ふーん、どんなやつらが来ているのかしら」

「あ、あの人は」

「おーい、久しぶりだな。」

「チェリツシュちゃん」

「ええ、元気でなによりですね。ゴグさん」

（それにしてもゴグさんと一緒にいるハンターはもしかして……）

「師匠久しぶりですね。」

「あらウイングあなたも来ていたのね」

「ええ、少しリフレッシュしようと思ひまして」

「なあ、チェリツシュの師匠のあの三次試験官のハンターは俺の師匠の師匠みたいだな」

「ええ、そうみたいですな」

（原作知識で初めから知ってたけどね）

「チェリツシュお前すごいプロハンターに弟子入りしていたんだな。」

「ええ、まあ（少し性格に問題がありますけどね）」

「ここで立ち話もしてないで店に入りましょう皆さん」

「ようこそ皆さんまっていましたよ」

カールさんに案内されて店の中に入ると

「うわー、すごい料理の数々ですね。」

グレイトスタンプの丸焼き  
クモワシの卵の親子丼等の  
すごい料理でいっぱいだった。

「でもこの人数でこの量は多すぎると思うんだが・・・」

ゴグはそれを指摘すると

「あー、実はこの料理の材料を調達した美食ハンターの1人が  
すごい大食いですって、それでこんなにたくさん用意したんですよ。」

「おいおい、どんなやつだよ  
その美食ハンターは？」



「まだ、食べられないの」

「もうお腹ぺこぺこだよ……」

その声ができる方を見ると……

野生的で綺麗な女性とものすごくでかく太った男がいた。

(メンチとブララじゃん……)

「まだなのー？このままじゃ料理が冷めるわよ」

メンチがカールさんに文句を言いだし

「メンチさん、ブララさん、もう少し待って下さいよ。」

レイラさんとその師匠の人がまだ来ていないんですから」

(そう言えばレイラさんの所の師匠はどんなハンターなんだろう?)

私がこんなことを考えていると

「すみませーん遅くなりました。」

「ほう、なかなか豪勢だな。」

お、久しぶりだな、チェリッシュ

ハンター試験合格おめでとう」

レイラさんと一緒にやって来たハンターは天空闘技場で知り合ったカイトだった。

「カイトさんがレイラさんの師匠だったんですか？」

「ああ、そうだ。レイラからお前のことは聞いている。まさか、こんな形でお前と再会するとは思わなかった」

「ねえ、もう皆揃ったんだから始めましょうよー」

「そうですね。じゃー皆、乾杯しましょう。」

「『カンパニー』」

その後、メンチ・ブハラ・ウイングとホームコードを交換したり

ブハラがあつという間に料理の大半を食べてしまったり

酒を飲んで酔ってしまったメンチが暴れだしたり

とまあ、いろいろあつたけど、結構、楽しめました。

23話 プロハンター達のお食事会(後書き)

次話から新章開始

24話 ヨークシンシティ(前書き)

ヨークシンシティ編スタート

## 24話 ヨークシンシティ

ビスケに弟子入りしてから半年ちよつとたち

私は2ヶ月ほど前からオーラの総量を増やすために  
練（堅）の持続時間を延ばす修行をしていた

「すいぶんとオーラの総量は増えたみたいね。

それにしても・・・

ピアノマッサージ

いくら桃色吐息とチャージ・ガンズを使っていた

とはいえ、たった2ヶ月で練の持続時間を

2時間から5時間以上にまで延ばすなんて

すごい成長スピードね。

普通は10分練の持続時間を

延ばすのに1ヶ月はかかるのに」

「どつとも・・・」

（その桃色吐息ピアノマッサージの高い料金で

お金を大量消費したくなかったから必死でやったからですけどね）

実は彼女はその桃色吐息ピアノマッサージの高額な料金の支払いで

天空闘技場で稼いだ4億の内約半分の2億ほどこの1ヶ月で失っていた。

「まったくあんたはいろいろとすごいわねー

具現化系と放出系で普通じゃありえない2つも得意系統を持っているし

念銃とガンベルトの能力はあなたと見事にハマっていたものだから  
かなりの攻撃力になっていたし」

そして、これほど優秀な弟子はあなたがはじめてよ  
と師匠は言った。

「ふう、オーラの無駄な消費を抑える技術も身についたようだし  
次の私の仕事の手伝いが終わったら卒業わさ」

「その仕事ってなんでしょうか？」

「9月に行われるオークシンでのオークションに出る  
超レアな宝石集めよ」

「それって仕事じゃなくて師匠の趣味じゃ・・・」

ビスケ師匠はそんなことないよーと動揺していたので  
多分、凶星だろう。

「ほ、ほら無駄話してないで行くわさ」

(あ、話を変えてごまかした)

3日後

リンゴン空港

「へー、ここがヨークシンシティですか  
ずいぶん人がいて賑わっていますね〜。」

空港の中は周りは人で視界を埋め尽くされていた。

「当たり前わさ」

この時期ここは世界で最も金が集まり

大きく動くのだから

それにまだオークションは始まっていないわ。

明日開催される頃にはもつと人がこの地に

集まるわさ」

「そついえば師匠が欲しがっている宝石はいつどこに出るんですか  
？」

「6日にサザンピースオークションだからまだまだ先わさ

あんたもこれからプロハンターとして活動していくためにも

しっかりとここでいろいろと学んでおきなさいよ」

「は、はい。わかりました。」

そして、2人は空港から出てタクシーに乗り

あらかじめ予約したホテルに向かった。

しばらくして2人は予約したホテルの部屋で一息ついていた

「ふー、ハンター証って本当に便利ですよー。ホテルや空港とかの施設はタダで利用できるんですから」

「調子に乗らない。」

盗まれたらどうするんだわさ。

まあ、あんたのホワイティ・バッグに常に入れておけば盗みようがないけど」

「わかっていますよ。盗まれないように気を付けますよ。あ、ちよつと散歩に行つて来ていいですか？」

「いいわよ。ついでに適当にお菓子買って来てね」

「はい、わかりました」

ボタン

「この仕事が終わつたら卒業してあの子とお別れか・・・  
一生会えないわけじゃないけど  
なんか寂しくなりそうわさ」

チェリツシュが部屋から出て行った後ろ姿を見て  
ビスケはいろいろと懐かしんでいた。



## 25話 ヨークシンシティ2

9月1日

私と師匠はオークションハウス「サザンピース」にサザンピースオークションの  
競売品目録カタログを買いに来ていた。

「は、販売価格は1200万つてずいぶん高いですね。」

「これくらい払えないとサザンピースオークション参加資格はない  
ってことわざ

だいたいこのオークションに参加している金持ちは皆だいたい少な  
くとも50億は持っているわよ」

「そういえば師匠はいったいいくら持っているんですか？」

「さあねー、秘密わざ」

(まあ、師匠はハンター歴40年のベテランのダブルの称号持つて  
るんだから  
それなりに大金を持ってて当然よね)

カタログの買い物は終わったあと2人は宿泊しているホテルでのん  
びりしていた。

「6日まで暇ですけどどうしますか？」

「まあ、やることはないからねー。」

「とりあえず私はここで本でも読んで寛いで  
あんたは自由時間ということだ。」

「じゃー私は値札競売市を見に行つてきますね。」

「はめを外さないようにね。」

「へー、いろんな物がありますねー。」

私は今値札競売市に来ていた。

そこは多くの出店が並んでいていたる所にたくさんの人でいっぱい  
だった。

「ここでちょっとやりたかったことがあつたんだよねー」

さて早速やりますか。凝つと」

私は店に並んでいる商品を凝で流し見しながら競売市をまわった。

「1日中歩き回ってオーラを出しているのを7品ゲットですか。さてと」

チエリツシユは大型の骨董品店に入った。

「すみませーん、これ等を買りたいんですが」

「お嬢ちゃんこれは家から持って来たのかい？」

「うん、捨てるのはもったいないから売るように言われたの。それでこれ等はどのくらいの価値があるんですか？」

「うーん、この壺はかなり古いけど、ずいぶん状態がいいし20万でこの短刀はジャポン製のものだけどかなりののできだから80万。こちらの皿3枚は希少なカキン国の貴族専用の皿で1枚120万だから」

3枚で360万

残りの傘と杖はそれぞれ25万で合計410万だね。」

店員は少し驚きながら鑑定した。

店員をそれとなく観察してみたが、嘘をついた様子は無さそうだった。

（まあ、私のような子供相手に嘘をつくなら7品みんな価値が低いものだという

嘘の鑑定結果を言うだろうから問題ないわね。）

「じゃあ7品全部それで売ります。」

「よし、いきなり400万近くの利益とは予想以上に儲かったわね。」

原作でゴン達がやっていた

凝でオーラを纏ってる商品を探す「念でぼろ儲け大作戦」

この金稼ぎがうまくいったことに嬉々しながらチェリッシュは宿泊しているホテルに

戻って行った。

## 26話 ヨークシンシティ3

9月2日

現在、私は6日までの自由時間に

師匠の桃色吐息ピアンマッサージで失った分のお金を稼ぐために

凝で掘り出し物を見つけて安く買って高く売るといふ

原作でゴン達があつてた念でぼる儲け大作戦をしていた。

そして、今は午前中買った掘り出し物を骨董品店に売っていた

「ふむ、この絵は60万で絨毯は45万で皿は85万で合計190万ジェニーね」

「おお、すごい儲かった儲かった」

お金を受け取って店から出たチエリツシユは値札競売市に向かった。

「さてこの調子でどんどん掘り出し物見つけてどんどん稼ごうと」

2時間後

「これどうしよう・・・」

ホテルの部屋でチエリツシユはさつき  
値札競売市で買った木像を見て呟いた。

その木像はただの木像ではない。

高価な財宝が入っている木造蔵である。

「と、とりあえず割って中を確認してみますか」

で、割ってみると中から

「うわー、すごいきれいな財宝がたくさん入ってるわ  
うーん、これは明らかに軽く1億以上

いやオークションにかけてうまくいけば4億以上になるかも・・・  
けどどこに売ればいいものか。  
売る際には慎重に行動しないと」

そうしてどうしようか悩んでいるとビスケ師匠が帰ってきた。

「ただいま、

なっ!？ そ、そのたくさんさんの宝石はどうしたんだわさ?」

「あ、師匠!実は・・・」

「なるほどねえ、凝で掘り出し物見つけて金稼いでいたら偶然、木造蔵という億級のレア物を見つけてしまったわけね」

「はい、そうです。」

「そして、どこに売ろうかと悩んでいたというわけね」

「はい、・・・」

どうしますか？

これ・・・」

「私が全部買いとるわさ。

3億でどうかしら？」

「どうもありがとございます。

これで全財産は6億ほどで

金稼ぎは順調ですね。」

「ずいぶん熱心に金稼ぎしているようだけど

そんなにお金が欲しかったの？」

「いえプロハンターとして活動するためには

それなりにお金が必要ですからできるだけ多く稼げるときに

稼いでいるだけですよ。」

（まあ、あとは師匠の桃色吐息で

失った分のお金を取り戻したかったからというわけでもあるけどね）

「そういう考えや行動は悪くはないわね。」

でも気をつけなさいよ。

今、この街には世界中のハンター・マフィアとかが集まってんだから面倒なことにならないようにしなさいよ」

「ええ、気を付けますよ。

危険な人達に目を付けられたくありませんからね。」

その頃、

ヨークシンのとあるホテル

この一室の部屋の中で坊主でサングラスをかけた野蛮そうな男が

メガネをかけた執事のような男に怒鳴りつけていた。

「木造蔵がもう売られていただと！

馬鹿野郎、あれはどれほどの価値がある物かわかってんのか？」

「はい、すいません。

売っていた店主はどうせ売れないだろうからという理由で即売っちゃったみたいで・・・」

「で、どこのどいつが買っていきやがった？」

「そ、それが・・・」

「あんっ」



「10歳ぐらい女の子らしいです。  
一応、似顔絵を用意しました。」

「たく、木造蔵を手に入れて  
オークションで高く売ってうちの組を  
大きくするための資金にする予定だったのに  
このガキのせいで・・・」

男はチェリツシュの似顔絵が描かれた紙を見ながら愚痴っていた

「リ、リーダー、このガキはすぐに探し出しますので安心してくだ  
さい。」

「当たり前だ！」

木造蔵の情報を手に入れるだけでずいぶん出費したんだ  
すぐに見つけ出して木造蔵を奪え  
手段は問わねえ」

チェリツシュが手に入れた木造蔵を狙って

とあるマフィア達が動き始めていたことに

彼女は知る由もなかった。

## 27話 ヨークシンシティ4

9月3日

「つけられてるわね。」

「ええ、朝からずっとですね。」

私は今、師匠とレストランで昼食をしていたのだが、

朝、ヨークシンめぐりで外出してからずっと感じる殺気や敵意がある

視線や気配でのんびり食べることができなかった。

「うーん、私は心当たりがありませんね」

「私は心当たりありすぎてどこの誰だかわからないわさ。」

「いったい、師匠はどれだけ他人から恨まれてんですか・・・？  
というか、敵の数がどんどん増えていますね。」

ああ、なんかいやな予感がしますよ・・・」

サングラスをかけた坊主頭のリーダーの男と50人ほどの部下が

少し離れた所からチェリツシュとビスケを見ていた。

「あいつが木造蔵を持っているガキか？」

「はい、似顔絵にそっくりで間違いありませんよリーダー」

リーダーと呼ばれた男はニヤリと笑い部下達に命令した。

「よし、人気のない場所で2人共すぐに捕まえて

木造蔵のある場所を吐かせろ。

いいな。」

「はい、わかりました。リーダー

木造蔵を手に入れたら、あの2人はどうしますか？」

「お前らの好きにしる」

部下達もニヤリと笑った。

だが後に彼らは後悔することになる。

彼らごとくでは手を出すべきではない相手に手を出してしまったのだから

「とりあえず路地裏にでも誘い込んで全員叩きのめすわぞ。」

これ以上付き纏われるのはうざったいし」

「そうですね、とっとと片づけましょう。」

私と師匠はレストランから出て町のはずれの空き地へとやって来た。

そして、ぞろぞろと黒服を着たいかにもヤクザです似的な人達がぞろぞろと現れた。

「よお嬢ちゃん達

俺達はブレディアファミリーのもんだが

昨日、お前らは値札競売市で木像を買ったはずだ。

それを俺達に譲ってくれねえか？」

サングラスをかけた坊主頭の男が前に出て私達に詰め寄って来た。

「木造蔵のことですか？」

「・・・知っていたか。

ああその木造蔵だよ。」

「そうね・・・

4億でいいならあんたらに渡すわさ。」

すると詰め寄って来た男は銃をガチリと師匠の頭に突きつけた。

「嬢ちゃん、勘違いしてねえか・・・

俺達は木造蔵をよこせと言ってるんだ。

売ってほしいなんて言っていねえんだよ」

「大人しく木造蔵を渡した方が身のためだぜ。そうすれば少なくとも死なずに済むかもしれないぜ。」

「あんまり俺達を怒らせんじゃねえよ」

周りの部下達は笑いながら言った。

「てめえらいつまでダンマリしてんだ？ああ？さてさっさと選りばいな木造蔵を大人しく渡すか。それとも死んだ方がマシな拷問を受けるか。」

「実力行使にでるんならこっちもそれなりの対応をさせてもらおうけど」

「はあ、結局こうなるんですか・・・」

「あ、てめえらぶざけてんのか？上等だ。やってみるよ！！」

ぐっと男が銃の引き金に掛ける指に力を入れた瞬間に私と師匠は動いた。

師匠は銃を向けていた男の銃を握っていた腕を捻って地面に叩きつけて

私は状況についていけない部下達を頭や腹を殴ったり蹴ったりして気絶させた。

「まったくチエリツシュ、あんたのせいで厄介事に巻き込まれたわけだけど」

何か言うことはあるかしら？」

「すみません、木造蔵を手に入れたことで

まさかこんなことになるとは全然予想していなくて……」

「まあ、いいわざ。

これくらいのトラブルはよくあることだし」

「がつ、て、てめえらいつたい何者だ。」

師匠に銃を向けたリーダー格の男は絞り出すように話しかけた。

「プロハンターわざ」

「な！？プロハンターだと！

ちくしょう、よりもよって

なんて俺達は運がないんだ……」

男はかすれた声で言った。

そんな会話をしていると仲間のブレディアファミリーが

またぞろぞろと現れた。

初めは戦うことになるかと思ったが

筋骨隆々な男が前に出てきて

「俺はブレディアファミリーのボスのカーネルだ。部下達が無礼なことをしてすまない。」

頭を下げてきた。

「あんたは話がわかる奴のようだね。

あたしはあまり気にしてないわさ

ハンターにとってこんなのは日常茶飯事だしね」

「私もあまり気にしていませんよ。

それなりに修羅場くぐって慣れていきますから」

「そうか・・・君達はプロハンターだったのか。

どつりで強いわけだよ。お詫びとして大したことはできないが

これは俺の連絡先だ。なにか困ったことがあったらここに連絡してくれ。

できる限り力を貸そう。

では俺はこれで」

そう言ってカーネルは倒れた部下達を連れて去って行った。

ホテルへの帰り道で私は師匠と今回の一件についての話をしていた。

「ちょっとトラブルがありましたけどマフィアとコネができましたから

今回は悪いことばかりじゃなかったかもしれませんね。」

「あなたね」

元はと言えばあなたのせいで今回のトラブルが起きて私は巻き込まれたんだから少しは反省しなさいよ。」

「・・・はい、すみません」

その後、軽く師匠から説教を受けるはめになり

少し涙目になったチエリツシュだった。



## 28話 ヨークシンシティ5

マフィア達とのトラブルから3日

私と師匠はサザンピースオークションに来ていた。

「なかなか似合ってるじゃないその格好」

「師匠もそのドレスはよく似合ってますよ」

白いドレスを着た私は赤色のドレスを着た師匠に言った。

「レンタルとはいえ、ドレス用意しておいて良かったですね。」

「あのねえ、ここはスーツやドレスを着ていないと入れない所なのよ。」

まあ、同時に子供が来るような所でもないけど」

周りの人達が私達に視線を向けてくるのを見ながら師匠は言った。

「ほら、そろそろ始まるから

とつとと席に着くわさ」

「あ、はい」

私はあわてて師匠の後を追って会場に入った。

「私はベンズナイフの下期型がほしいですねー。」

「私はライ王朝の瑠璃絨毯ですわ。」

「ふふふ、この日のために200億も用意しましたよ。」

オークション会場はすでにたくさんの人で埋まっております

会場にいる金持ちは皆王族・貴族等の権力者や高名なマフィアや実業家ばかりであり

これから始まるオークションの話で花を咲かせていた。

そんな金持ちたちの観察をしていると綺麗な女性がステージに現れて  
サザンピースオークションが始まった。

『はい、瑠璃絨毯は159億シエニーで落札です。』

続いていきましょう。次の商品は幻の宝石です。

温度・湿度等の周りの環境によって色が変わる不思議な宝石  
エアメンタルストーンです。』

幻想的に青色に輝く拳ほどの大きさの宝石が出てきた。

「よし、来た来た来たわさ」

自分の目当ての物が出てくると師匠はテンションを上げてはりきっていた。

『それでは行きましょう。まずは5億ジエニーからスタート』

5分後

『75億出ました』

『76億出ました』

『81億出ました』

『82億出ました。』

もう入札者はいませんか

はい82億ジエニーで落札です。

おめでとうございませす。』

「よっし、エアメンタルストーンをゲットわさ」

「良かったですね。 師匠」

私は無事に目的の物を手に入れて嬉々している師匠と帰路についていた。

「それにしても82億も出費しましたけど大丈夫なんですか？」

「大丈夫、大丈夫これ位は2・3ヶ月もあれば取り戻せるから」

（82億をこれ位つてさすがダブルハンター・・・）

そんなのんきな会話をしていると

いかにも野蛮な人達が現れて私達を取り囲んだ。

「誰よ、あんた達は？」

すると丸く太った金髪の男が前に出てきた。

（あの人は確か師匠と最後までエアメンタルストーンを競り合って

いた人だ。

ということはおそらく用件は・・・)

「先程はどうもお嬢さん、私はグレラゴウオーカー伯爵と言います。」

男はゆつたりと貴族らしい動きで名乗った。

「あたしはビスケット＝クルーガ といいます。それで何のご用でしょうか？」

師匠は一応の礼儀というわけで名乗り返し

面倒くさそうに用件を聞いた。

(この様子からおそらく師匠も相手の目的はわかっているみたいですね。)

私は戦闘態勢を取りながらそんなことを考えていた。

「たいした用ではありませんよ。あなたが先程購入した宝石を譲ってほしいんですよ。」

下卑た笑みを見せながらグレラゴは答えた。

「悪いけどあたしはこの宝石は気に入ったんでね。だから断るわさ。」

師匠はあっさりと断った。

「ふふふ、譲ってもらいますよ。  
・・・どんな手を使ってもね。」

グレラゴはパチンと指を鳴らすと周りの部下達が襲いかかってきた。

まず師匠にナイフや大剣を持った男達が襲いかかり

「とりゃー！！！！」

男達は思いっきりナイフや大剣を振り落としたがあっさりと師匠は避けて

全員に顔面に拳や蹴りを喰らわせてぶっ飛ばして

「ゴハア！！！！」

血反吐を吐きながら宙を舞って地面に壁に叩きつけられた

私の方には銃を持った男達が私を射殺しようとしたが

ドンドンドンドンドンドン

「な！？全部撃ち落としゃがっただと」

「ぐ、ぐああああ

う、腕が・・・俺達の銃が・・・」

私は向かってきた弾丸を撃ち落として

それに男達が動揺した際に彼らの銃と腕を撃ち抜いた。

「こ、このクソガキがー!!!」

怒った3人ほどの男がナイフを持って私に突撃してきたが

「ぶべらッ」「」

カウンターを喰らわせて師匠にぶっ飛ばされた男達のように  
舞空体験をさせてあげた。

「そ、そんな私の優秀な部下達が・・・」

グレラゴはポタポタと汗を流し顔を青くしながら呟いた。

そんなグレラゴに師匠は詰め寄る。

「さてと・・・」

「ヒ、ヒイイー!!!」

「あたしに2度とこんなふざけた真似をしないよう  
しっかりと教育するとしますか。」

「わ、私にこんな真似をしてタダで済むと

「こ、こら離せ！！な、なんだ何をする気なんだ？  
や、止める、止めるんだ。ヒ、ヒイイ！！  
お願いだもうお前らに手を出さない。  
許してくれ止めてくれええええええ！！！」

その後、グレラゴの壊れたような悲鳴が周辺に響き渡った。

数日後

リンゴ ン空港

私は師匠と別れの挨拶をしていた。

「師匠、今までいろいろとありがとうございました。」

「短いような長いような半年だったけど  
楽しかったわさ。」

「私もそれなりに楽しくていい勉強になりましたよ。」

「それは良かったわ。  
じゃあ気を付けてね。」

「ええ、さようなら  
師匠またどこかで会ったらよろしくお願いしますね。」



そして師匠は行ってしまい

最後にバイバイと聞こえた気がした。

「よっし、修行は終わったことだし  
家に帰って今後の予定を考えますか。」

私は気合を入れ直して空港から出て行った。

28話 ヨークシンシティ5（後書き）

これでヨークシンシティ編は終了です。

これからオリジナルな展開の話になります。

## 29話 寄り道

「ここが金脈で有名なコンゴ山かー。」

私はコンゴ山にようこそという町の看板と門を見て呟いた。

師匠と別れて3日後、私は実家ではなくコンゴ山にいた。

フリーダム・ゲートですぐに実家に帰ることはできるのだが

別に急いで帰る必要はないので少しゆっくりと寄り道で

そこら辺を適当に観光でもしながら帰ることにした。

「さて観光名所をまわりますか。」

そう言っつて私は町に入った。

「んー、美味しい美味しい  
来て良かったな」

チエリツシユはホットドックを食べながら食道楽を楽しんでいた。

「それにしてもここは観光名所のはずなのに人が少ないいなー  
なんでだろ？」

チエリツシユはそのことに疑問を持っていると

町の奥から悲鳴や怒号が聞こえてきた。

「ん、なんだろ？」

騒がしいわね。」

町に入っただけしばらく歩くと広場に出て

そこにたくさんこの町の住民らしき人達がなにやら騒いでいた。

とりあえず私は野次馬に混ざって話を聞いてみることにした。

「むごいな・・・」

「かわいそうに・・・」

そこには血まみれの死体があった。

「自分達の悪口を聞いたからってここまでやらなくても」

「ちくしょう、レイバー盗賊団

絶対にゆるさねえ・・・」

「復讐だ！」

皆すぐに死んだ者達の敵を討つために  
レイバー盗賊団のアジトに攻め込むぞ。」

そのまま一部の町民達が盗賊のアジトに向かおうとすると

「やめんか!!」

制止の声が響き渡り

威厳がありそうな老人が現れた。

「町長!」

「レイバー盗賊団のボスの強さをよくわかっておるじゃろつ。  
武装した警察が束でかかっても無理じゃたんじゃぞ。

あんな奴らにお前らで敵うわけがないじゃろ。

無駄死になるだけじゃ」

「じゃーどうするのですか?」

このままじゃどんどんここに訪れる観光客は減って

この町は終わりですよ。」

「ハンターを雇うのじゃよ。

それしか手はない。」

「しかし奴らは銀行や役所とかも襲撃したせいでこの町には  
金はあまりありませんよ。」

「金脈から掘り出した金もみんな奴らに強奪されたのですよ。  
それで高額な報酬を用意できるんですか?」

「それについて手は考えておる。  
ほら話の続きは会議でするぞ。」

そして、町長は町民達を連れて移動しようとする

私は町長と目があつた。

町長は私に近づいてきて話しかけてきた。

「お嬢ちゃんここに観光かね？」

「ええ、まあそんなところです。」

「その様子じゃと今の話を聞いていたようじゃな。

レイバー盗賊団に目を付けられる前にこの町から出なさい」

「ええ、そうします明日朝早くに・・・」

「ではお嬢ちゃん気を付けてな。」

そう言って町長と町民達は去って行った。

夜、宿屋でチェリツシュは寛ぎながら少し考え事をしていた。

(うーん、武装した警官達をあっという間にしかも素手で倒す・・・十中八九盗賊団のボスのレイバーは念能力者ね。)

とりあえずその後これからどうするかを考えていると

「町の門にレイバー盗賊団が来たぞ　!!」

「まさか、向こうからやってくるとはね・・・」

私はすぐに宿屋から外に出て町の門に向かった。

「てめえ等が俺達の討伐依頼をハンターに出すために町中の金をかき集めているのは分かっている。その金を全部渡してもらおうか。」

門にはすでに町の人達の大半がいて

盗賊達は町長や門番達を痛めつけていた。

「ウグツ・・・ハアハア」

「町長!!」

「お前ら大丈夫か!!」

「ほらほら、大人しく渡したほうがいいぜ。  
死にたくないだろ。昼間の馬鹿のようになー」

金髪で顔に入れ墨をした男レイバーは笑いながら言った。

「てめえー、もう我慢ならねえ」

何人かの若者の町民達が鉄パイプやナイフやフライパンを持ってレイバーに襲いかかるが

「ふん、雑魚がつ」

ヒュッ

バキヤベキッ

「っっなっ!!」「っ」

レイバーは普通の人には見えない攻撃で彼らの武器を破壊した。

(なるほど・・・)

オーラを鞭状に変えて攻撃する能力か。

シンプルだけどそれなりに攻撃力はあるそうね)

私は凝でレイバーを観察して相手の能力の考察をした。

「どうやらまだてめえらは俺に逆らうつもりらしいな。  
お前らあれを見な」



「あ、あれは!!」

「た、助けて・・・」

「グスグス・・・いやだ。死にたくないよう・・・」

「皆、ごめんなさい捕まっけてしまいました・・・」

そこにいたのは縄で縛られた町の娘達だった。

「お前らが俺に完全に逆らわないように

見せしめに1人殺しておくとするか・・・」

「お、お願いだ、金は渡すからやめてくれえー」

町長は泣いてレイバーに頼んだが

「悪いなー、俺は何事も徹底的にやるタイプなんでな。

お前ら適当に女を1人殺せ」

「「「いやー!!」」」

「「「ああー!!」」」

彼女達と町民達は叫び、ある者は顔をそむけある者は自分が無力であることを知り泣いた

が、いつまで経っても盗賊達や町民達の予想した展開にならなかった。

「・・・おい、小娘1人殺すのいつまでかかってんだ。  
お前らもなにボサツと突っ立ってるん・・・」

ドササツ

「な!!」

急にレイバー以外の盗賊は全員倒れてこの場は静まり返った。

そして、

「大丈夫ですか？」

人質になっていた町娘達のそばに1人の少女が現れた。

### 30話 チェリッシュVSレイバー

「大丈夫ですか？」

私は彼女達の縄を解きながら言った

「え、ええ……ありがとう助けてくれて……」

「君は昼間の……」

町長は私を見て呆然としながら呟いた。

「ま、まさかてめえは……」

レイバーは苛立った顔で高く呟いた。

「ええ、プロハンターですよ。

あなたが恐れている。」

「「「!!!」」」

ポカーンとしていた周りの町長や助けた彼女達や町民の人達は

ギョツと驚きながら私を見た。

「そうか……ならプロハンターの譲ちゃん  
死にやがれ!!!」

レイバーは顔を真っ赤にしながら右手を振って鞭攻撃をしてきた

私はそれを伏せてかわして練をしてレイバーに突っ込んだ。

それに対してレイバーは

「甘いぜ。俺のウィップソード（刃鞭の剣）は両腕同時でもできるんだよ。」

そして、レイバーはチェリツシュに向けて左腕の鞭を振るっただが

ドンッ

チェリツシュの念弾によって鞭は破壊された。

「なっ！！お、俺のウィップソード（刃鞭の剣）が！！」

「あなたの能力は結構攻撃力がありますが、2つ弱点があります。まず1つ目は攻撃が単調で避けやすい。

2つ目は接近戦には向いていないことです。

だから、このように接近した私には対応できないでしょう」

チェリツシュはレイバーに距離を詰めて言った。

そして、それを聞いたレイバーは

「ふ、ふざけんじゃねー

このガキがアアアア！」

とてつもない怒声をあげてチェリツシュに殴りかかったが

「ふんっ」

「グガッアアアア……………」

私は人体急所の肝臓に正拳突きを喰らわせて

それをまともに食らったレイバーは10m程血を吐きながら回転して宙を舞いぶっ飛んだ。

こうしてレイバー盗賊団は完全壊滅した。

次の日

早朝に隣町の警察が駆けつけて捕縛したレイバー盗賊団を連れて行ったので

町には活気が戻っていた。

「どつぞ、これが賞金です。」

警部さんからレイバーの首にかかっていた

賞金5000万ジェニーの報酬を振り込みで受け取り

私はほくほく顔になった。

「さて次はお礼を言いたがっている町長さん宅に行きますか」

私はそれを眺めながら町長の家に向かった。

「昨夜はレイバー盗賊団を討伐してくれてありがとうございます。

これでこの町には平和が戻りました。

これは少ないかもしれませんが報酬1億ジェニーです。」

そう言って町長の爺さんは1億ジェニーもの大金が入ったカバンを出した。

「あー、私は警察からすでに賞金を受け取っているの  
別にいいですよ。」

私は少々とまどいながら受け取るのを断った。

「いえいえ、気にしないでください。このお金は盗賊から取り返す  
ものですし

他に盗られた砂金・黄金・金塊も全て我々の手に戻りましたから  
これくらいの出費はたいしたことありませんよ。」

私は少し考え

「・・・わかりました。それではありがたくこの報酬はいただきま  
す。」

そして、1億ともの大金が入ったカバンをホワイティ・バッグに入  
れて町長宅をあとにした。

町の門に行くときたくさんの人が集まっていた。

「あ、プロハンターさんが来た」

「昨日はいろいろとありがとうございました。」

私が現れると皆私に群がって来た。

「わ、私はたまたま通りかかっただけですよ。」

「それでも私達を助けてくれたことに変わりがないですよ。」

「ハンターさんありがとうございます。」

「どういたしまして、ではわたしはこれで」

「また来てくださいね」

「本当にありがとう」

「お気を付けてー」

こうして私はコンゴ山をあとにした。

ちなみに余談だがコンゴ町はこの後急成長をして

数年後、世界規模で有数の観光地になり

それを新聞で知ったチェリッシュは驚くことになる。



### 31話 帰宅

「なるほどなあ・・・  
ずいぶん大冒険したようだな」

「まったく無理はしないでと言ったじゃない。」

「あはは、ごめん」

でもハンターという職業は厄介事に巻き込まれやすいから  
ちよつとどうしようもないんだよね・・・」

私はパドキアのはずれの自分の実家で両親と

私のハンター試験合格祝いの豪華な晩御飯を食べながら

ハンター試験のことやこの10ヶ月間の出来事を両親に話していた。

あらかじめ連絡しておいたのに帰ってきたときに母さんは泣きながら

私に抱きついてきたというイベントはあったけど

それ以外は特に変わったことはなく私は食事を楽しんでいた。

「これがハンター証か・・・」

「どんなものかと思ったけど見た目はずいぶん普通のカードね。」

食事を終えてから私は両親からハンター証を見せてほしいと言われてハンター証を見せてあげていた。

「言っておくけどそれは私しか使うことはできないし、まあたとえば使っても」

ここで使ったりしたら、私の情報が外に流れてハンター証目当ての小悪党達が

この町に集まるからね」

「むう、便利なのか不便なのか複雑な物だな・・・」

「場所やタイミングや状況を良く考えて使う必要があるわね。」

そんな会話をしながら私は両親と談笑した。

それから両親とガンシヨの仕事の手伝いをしたりして過ごした。

そして2週間後

私は幼い頃に念の修行していた町のはずれの草原に来ていた。

「あー、懐かしいなー。」

「ここでキツネグマに襲われて特大念弾を撃っちゃたんだけ」

「そうしてチエリッシュは過去を懐かしんでいると・・・」

「ここにいたか。探したぞ。」

「あ、父さん」

「・・・また、旅に出るのか？」

「うん・・・」

「ハンターの仕事をしながら」

「適当に世界をまわる予定かな。」

「そうか・・・」

「明日に出発することにしたわ。」

「なら今夜はパーティと豪華な食事にするかな。」

「今日はお前の11歳の誕生日でもあるからな。」

「私は父さんとそんな楽しい会話をしながら帰宅した。」

次の日

家を出て、列車の駅で両親と別れることになった。

「じゃあハンターの仕事を頑張っつてね。」

「定期的に帰ってくるんだぞ。」

「うん、1年の数回ぐらいは帰ることにしてるから」

「じゃあ気を付けてね。」

「じゃあ、父さん、母さん行ってきます。」

私は少し恥ずかしながら笑顔で手を振って列車に乗った。

「行ってしまいましたね・・・」

「ああ・・・そうだな。」

両親は見えなくなった自分の娘が乗った列車の方をじっと見ながら  
呟いた。

「まあ一生会えないというわけじゃないんだ。」

帰って来たときに親の俺達が逆に心配かけられないようにしないと  
な。」

「ええ、そうなたら合わせる顔がありませんしね。」

両親は笑いながら家に戻って行った。

31話 帰宅（後書き）

次話から放浪編スタート

32話 偽者×偽物（前書き）

放浪編スタート

### 32話 偽者×偽物

「んー、空気がおいしくて平和な村ですね。」

私は名もないのどかな村にやって来ていた。

「この店で食事にしますか。」

そして、チェリツシユは適当に選んだ飲食店に入った。

「お嬢ちゃん、旅行者かい？」

昼食をしていると店のマスターのお爺さんが

心配そうな顔をして私に話しかけてきた。

「ええ、そうですが。」

「悪いことは言わない。

あの男に目を付けられる前にこの村から出なさい。」

「あの男？」



「来たっ！！」

お嬢ちゃんここに隠れていなさい！」

いきなりお爺さんは私を店の奥に押し込んだ。

私は何が何だかわからなかったがお爺さんの必死な様子を見て大人しく従った。

そして、絶をして隠れていると

筋肉ムキムキの男とその部下・手下らしき男達30人程が店に入っ  
て来た。

「よおマスターこのプロハンターのドリュウ様が今月の上納金を貰  
いに来たぜ」

ドリュウと名乗った男は汚い笑みをを見せていきなりお爺さんに金を  
要求した。

「・・・」

お爺さんは無言で言われたと通りにお金を渡した。

「ふむ、よしよし御苦労御苦労

じゃー仕事頑張れよー」

そう言ってドリュウは笑いながら部下を連れて店を出て行った。

「くそっ!!」

ドリユー達がいなくなったのを確認したチエリツシュは

隠れるのをやめて出てくるとお爺さんは

腕をテーブルに叩きつけて悔しそうな顔をしていた。

「はあ・・・」

お嬢ちゃん強引に店の奥に連れ込んだり  
いやなものを見せてすまなかったね。」

「いえ別に気にしていませんよ。」

それでさっきの人はいったいなんですか？」

「あいつはドリユーという奴でプロハンターさ。」

「プロハンター・・・」

「ああ、そうさ。」

あいつはプロハンターの権力で

この村で手下達を引き連れてやりたい放題しているんだよ」

「なるほど・・・」

それであいつは私にちよつかいを

かけるかもしれなかったから

私を店の奥に・・・」

「ああ、その通りさ。

お嬢ちゃんさつきも言ったが面倒なことになる前に早くこの村から出なさい。」

「ええ、わかりました。

では私はこれで……」

そう言っつて私は店から出た。

村の中を歩きながら私はあのドリュウについて考えていた。

(あの男は念能力者じゃなかった。

ということとは……あいつは多分プロハンターの名を語った偽者でしようね。)

そんなことを考えながら私は村の出口に向かった。

「さて次はどこに行きましょうか。」

チェリツシュは村の門をくぐるつとすると

「待ちな、そこの嬢ちゃん」

目の前にドリュウ達が現れた。

「私になんの用でしょうか？」

私は嫌そうな顔をしながらドリュウに質問した。

「なに大したことじゃねえよ。

ここの通行料を払ってもらっただけさ。

旅人の嬢ちゃん」

ドリュウ達はギャハハハと下品に笑いながらチェリツシユの質問に答えた。

「おい、小娘。とつとと通行料100万ジェニー払いな。ちなみに払えない場合は俺らの遊び相手になってもらうぜ。」

手下の1人が私に詰め寄って脅してきた。

私はため息をついて

「嫌ですよ。なんで村の者じゃない私があなた達にそんなことをしなければいけないんですか？」

堂々と通行料支払いを拒否した。

「おいおい俺はプロハンターだぜえこのハンター証の力を知らねえのか？お前に拒否権なんてないんだよ。」

ドリュウは自分が持っているのと違う

明らかに偽物のハンター証を見せて

笑いながら言った。

私はまたため息をついて

「そんな偽物のハンター証を見せて何を言っているんですか？  
偽物のプロハンターさん」

その瞬間ドリュウ達の時間は一瞬止まった。

「お、おい・・・ふざけたことを言いやがって  
覚悟はできてんだろっな？」

ドリュウは動揺しながらチェリツシュを脅した。

「プロハンターの身分詐称や詐欺罪であなた達が捕まる覚悟のこと  
ですか？」

私は少し笑みを浮かべながらドリュウ達を挑発した。

「そうか・・・  
死にたいようだな。  
殺せ！！」

ドリュウは怒りで頭に青筋を浮かべてチェリツシュを殺すよう手下  
に命令した。

そして、私の周りにいたドリュウの手下達が私に襲いかかってきた。

5分後

「そ、そんな馬鹿な・・・」

こ、こんな小娘に俺の手下は全滅だと・・・」

私の後ろにはドリュウの手下達の山が出来上がっていた。

それを見たドリュウは眼を見開いて固まっていた。

「さてと・・・」

私はドリュウに詰め寄った。

「な、なな何者だ。お前は・・・？」

ドリュウはガタガタと震えながら言った。

「通りすがりのプロハンターですよ。

ちなみにこれが本物のハンター証です。」

私はハンター証を見せて答えた。

その後、ドリユーは私がプロハンターだと知った瞬間に逃げようとして

即、その場で叩きのめして捕縛した。

そして、隣町の警察を呼んでドリユーや手下達を逮捕してもらい

一件落着となった。

「いやー、君のおかげで助かったよ。  
本当にありがとう。」

マスターのお爺さんは警察の護送車に連れて行かれるドリユーを見て嬉しそうに言った。

ちなみに今のドリユーの顔はさっきの汚い笑みとは逆に絶望に満ちていた。

「どういたしまして」

その後、お爺さんからお礼にタダで御馳走してもらった

「モグモグ

ふー御馳走様」

「なんだいまうお腹いっぱいかい

お嬢ちゃんのためにたくさん作ってやったのになー」

お爺さんはガハハと豪快に笑っていた。

「ではそろそろ私は行きますね。」

「おう、頑張れよ。小さなプロハンターさんよ」

そして、たくさんのお食料もタダでもらって私は村をあとにした。



33話 帰らずの洞窟(前書き)

あの最強のハンター登場

### 33話 帰らずの洞窟

その日、少年はいつものように洞窟での採取・採掘を終え、

安堵の表情を浮かべながら村に戻って来たところだった。

この洞窟には珍しい薬草やダイヤがたくさんあるのだが、

同時に凶暴な魔獣や猛獣も多く生息しているためにかなり危険な所である。

村の人間は小さい頃から鍛え上げた危険回避能力と

御先祖様が書いた薬草やダイヤの群生地を記した洞窟の地図でなんとか

採集して戻って来ることができるのだ。

洞窟の奥に進めばもっとすごいのが採れると思うが、

洞窟の奥に行つて戻つて来たものはいない。

この村の住民達はそのことはよく理解しているのだが、

この地に訪れるよそ者達はこの洞窟はどれほど危険なのかわからな  
い。

そのため好奇心・生態自然調査・金目当ての欲に駆られた連中等の

数多の人達が村の人達の忠告を無視して洞窟の奥に行つては  
ことごとく行方不明あるい無残な死体となつて発見された。

そのためこの洞窟は村の人間は帰らずの洞窟と呼んでいる。

そして、この日も洞窟に入ろうとする無謀なよそ者が現れた

今回のよそ者は10歳前半の少女だった。

少年は洞窟へ入るのがどれだけ危険かを話したが、

その忠告に、大丈夫ですよ。忠告ありがとうございますと

礼を言つて笑つて洞窟に向かつて行つてしまった。

少年は彼女が帰らぬ人となったことを惜しみ静かに黙とうをした。

半日後に彼女は無傷で嬉々しながら戻つてくるとは知らずに

「ここが噂の帰らずの洞窟かー」。

でかいですねえ。」

私は帰らずの洞窟の入り口にいた。

ここに来たのは小遣い稼ぎ今後の旅に役立ちそうな薬草を採りたいためである。

「さて行きますか。」

そして、チェリツシュは洞窟の中に入っていった。

「噂通り自然の宝庫ですね。ここは」

貴重で高価な薬草やダイヤ等を手に持ってチェリツシュは嬉しそうに呟いた。

そんなチェリツシュの背後から人食い虎が襲いかかったが

「ガア　！！」

「ほいと」

ズガンッ

あっという間に彼女に返り討ちにされた。

「全く次から次から面倒ですね・・・」

チエリツシユは洞窟の奥に進んだら猛獣に

襲われては倒す襲われては倒すを繰り返していた。

「まあいいか。とりあえず解体しよう」と

私はこれまで返り討ちにした猛獣と同じように

虎を解体して売れそうな毛皮や牙や爪を剥ぎ取った。

「うーん、ずいぶん奥に進んだな。」

洞窟に入って3時間たちチエリツシユはかなり採集をして

猛獣も10匹ほど返り討ちにしてから学習したのか襲ってこなくな  
った。

「採集した素材はホワイトイティバッグに入りきれなくなってきたわね。  
そろそろ帰ろうかな・・・」

ん、あそこは明るいわね。行ってみますか。」

そう言ってチエリツシユは洞窟の一番奥へと向かった。

「す、すごい・・・」

そこは光り輝くダイヤで視界を埋め尽くしていた。

「師匠がものすごく喜ぶでしょうね。」

私はその幻想的な光景に目を奪われていると

ザッザッ

「誰っ!!」

こんな所にいるはずのない人の気配がした。

しかもこちらに近づいてくる。

私は円を広げて警戒しながらすぐに戦闘態勢を取った。

そして、現れたのは

「おいおい、そんなに警戒するなよ。お嬢ちゃん  
俺は敵じゃねえよ。」

薄汚れた白い長袖のシャツにズボンというラフな格好をした男だった。



### 34話 ジン⇨フリークス

強い・・・

それが私の突然現れた男に対する第一印象だった。

現れた男はとてつもない強さだった。今の私では手も足も出ないほどに

同時にどこかで見たことがあるような感じがすると思ったが

すぐに頭を切り替え警戒した。

「俺はジンだ。プロハンターだ。

お前さんは？」

突然現れた男ジンは無邪気に笑いながら自己紹介した。

（思い出した！

この人はジン⇨フリークスだ。）

「チェリツシュ⇨バートンです。

私もプロハンターです。」

（まさかこんな所でゴンの父親のジンに会うなんてね・・・  
まあ原作知識でのこの人の性格や行動パターンから  
この洞窟にいてもおかしくないかもしれないけどさ・・・）



「あなたは十二支んのジン、フリークスさんですよ？  
カイトさんからあなたのことは聞いています。  
あの人はあなたを必死に探していましたよ。」

「ほー、カイトの知り合いだったのか。  
どういう関係か聞いていいか？」

「いいですよ、私はカイトさんとは天空闘技場で会いまして・・・」

「というふうになカイトさんは楽しくハンターの仕事をしながらあなたを探しています。」

「そうかあいつはずいぶん成長したみたいだな・・・」

ジンは話を聞いてしみじみと懐かしんでいた。

「あ、そうだ。ちょっと頼みがあんだけど  
いいか？」

「内容によりますが、なんでしょうか？」

「俺にはゴンという息子がいてなー。  
少なくとも3年後くらいになるが  
将来あいつはハンターになるかもしれないだわ。」

もし会ったら出来る限り手を貸してやってくれないか？」

(うーん、原作にはあまり関わりたくないけど  
少しゴンに手を貸す位はいいかな。)

「わかりました。まあできる限りではありますけどね。」

「ふー、お嬢ちゃんとの話は楽しかったぜ

じゃあ縁があつたらまた世界のどっかで会おうぜ。」

そう言ってジンは去って行った。

ジンがいなくなったことを確認したチエリツシユは

(あれが世界最強のハンターですか・・・  
すごいですね。マジで・・・)

少し呆然となりながらしばらくジンが去った方を見ていた。

私は帰らずの洞窟から出てすぐ近くの村の宿で一休みしていた

まあ村に戻ったら私に洞窟の危険を忠告した少年が

とんでもなくビックリして私を幽霊か何かと思って

気絶してしまうイベントがあったけどね。

それ以外は特に変わったことがなく村に戻った私は

とりあえず私はカイトさんに連絡を入れてジンさんに会ったことを話すことにした。

『そうかチェリッシュはジンさんに会ったのか。』

「ええ、偶然ですけどね。

ジンさんもカイトさんのようにハンター業を楽しんでいるみたいですよ。」

『まあジンさんはもうその場にはいないと思うけどすぐに俺はそこに行ってみるか。

教えてくれてありがとな。』

「どういたしまして

じゃあカイトさんもジンさん探し頑張ってくださいね。」

『あ、そうそうレイラのことだが、先日に裏試験を終えて

別れたんだが、あいつはこの9カ月の間にとんでもなく強くなったから

再会したときにはいろいろとビックリすると思うぞ。じゃあな。」

そう言ってカイトさんは電話を切った。

そして、今後のことを考えていた。

「ふう……」

これからどうなるんだろうなー

まあ3年後の話だから、ゆっくり考えるかな。」

そう結論を出し、私は寝ることにした。

### 35話 悪食鮫

「・・・」合計1億2000万ジェニーで引き取らせていただきます。」

私はここに来た目的は先日帰らずの洞窟で採った素材を売るためにジャポンの西に位置するとある港町に来ていた。

一部のダイヤや毛皮を残して売ったのだが

それでもずいぶん稼ぐことができた。

受付の女性はずいぶんビックリしてたけどね。

当然、いろいろと聞かれたけど仕方なく

ハンター証を見せて説明して納得してもらった。

まあ全部希少で高価な素材ばかりを大量に売ったんだから当然だけど

「じゃここに振り込んでおいて下さい。」

そして、私は引きつった笑みの表情の受付の女性に振り込みで払うように言って

お金を振り込まれたのを確認した私は店をあとにした。

素材を売ってから30分後。

私は同じ街内のレストランで腰を落ち着けて昼ご飯を食べていた。

「うーん、とりあえずパドキアから南に南へと旅して来たけど、これからどこに行こうかな？」

私は地図を見てカレーライスを食べながら次はどこに行こうか考え

「よし、決めた！」

この町の定期船で次はジャポンに行ってみますか。」

そして、食事を終えた私はレストランをあとにした。

だがジャポンの定期船に乗るために港に行ってみると

「え、定期船は出ていない？」

「はい、最近この辺りに凶暴で巨大な人喰い鯨が現れましてそのせいでその鯨の退治が終わるまで船は出せないのですよ……」

「そうですか……」

(仕方ないしばらく時間を潰してからまた来よう)

私はそう考え船着き場から去ろうとすると

「い、いました!!あの娘です!!あの女の子ですよ!!」

「・・・」

いったい何だ?と声がした方を見ると

人差し指を私に指しているさっきの受付の女性と漁師の人達がいた。

(ああ・・・なんかいやな予感)

そんな思考を頭に浮かべていると漁師の人達はまっすぐ私に向かって来た。

「あ、あなたはプロハンターですか?」

漁師達の中で最も年上そうなおじさんが震える声で私にたずねた。

ポカーンと見ていた周りにいた人達も驚いて目を見開いて私を見た。

私はため息をつきつつ、質問に答えることにした。

「ええ、そうですか。」

私に何の用ですか?」

すると漁師の人達は動揺しながら

「お、お願いです。最近、この近海を荒らしている悪食鯨を退治してください!!」  
6000万ジエニー程用意しましたのでこれをお願いします!!」  
いきなり全員頭を下げて鯨退治を頼んできた。

それを見た私は

「と、とりあえず場所を移動しませんか。  
静かに話し合いはできる所に・・・」

周りの人達の視線がものすごく痛いし・・・

公民館

「なるほど・・・」

悪食鯨のせいでこの町の漁業等に大打撃を受けているので一刻も早くあの鯨を討伐してほしいんですね?」

「はい、先日、我々はあの鯨を討ちに行っただんですが、とてつもなく堅い皮膚でまったく銃や鉋がきかなくて10mもの大きさを駆使した体当たりや大きな牙で喰い壊されていくつかの船は沈められてそれで海に落ちた仲間はやつの餌食になっちゃいました。」

この町の町長のお爺さんは悔しそうに説明した。



「なるほどよくわかりました。この依頼を受けますので安心してください。」

そして、早速狩りの準備をしようとする

バンッ

いきなりドアは蹴り破られ若者達がズカズカと部屋に入って来て町長に詰め寄った。

「おい！町長これはいったいどういうことだ？

悪食鮫は俺達が始末すると言っただろ！！

プロハンターだか何だか知らないがこんな小娘に頼むなんてどうかしてるぜ。」

「お前達の言うことはよくわかるが。

あれはお前たちでは太刀打ちできる存在ではない

頼む、わしの言う通りにしてくれ・・・」

町長は頭を下げて説得するが、若者達のリーダーらしき巨漢の人は私に顔を向けて

「おい、お前はプロハンターなんだつてな。

俺と勝負しろ！俺が勝ったら手を引けお前が勝ったら町長に従う。

いいな！！」

(はあ・・・なんか面倒くさいことになったなー)

そして、結果は当然

「そんなこの町で一番強いバリーがあんなチビに瞬殺だと・・・」

「気が済みましたか？」

私はボロボロになって仰向けに倒れたバリーを見下ろして言った。

「ああ約束は守る・・・」

バリーは落ち込みながら答えた。

そして、私は気を取り直してすぐに鮫退治の準備に取り掛かろうとすると

「お、おい！！あれ見ろ！！」

ハマさんが悪食鮫に襲われているぞ！！」

その言葉に海を見ると鮫に襲われてどんどん壊れている船があった。

「なんであの人は船出してんだよ？」

「あの人は生活に困りに困っていたからな・・・」

「そんなこと言ってる場合じゃねえよ！

早く助けねえと！！」

その光景を見た私は最近よく出すため息をつきつつ

「まったく今日は面倒なことばかり厄日ですかね。」

助走を付けて

「よつとー」

ハマの船に飛び乗って

「な、なんだ！！君は？」

ハマを無視してこちらに突進して来た10mもの大きさの悪食鯨に銃を向けて

ドンッ

一発で頭を撃ち抜いてあっという間に仕留めた。

「す、すげえ。俺達がまったく手も足も出なかったあの鯨を一撃で・・・」

ハマや港にいる漁師達は呆然としながら呟いた。

「まだ、終わっていませんよ。」

「ど、どういふことだ？」

「あれを見てください。」

そして、全員チェリッシュが指差した方向を見ると

「な、なんだよ！！あの数の鯨の群れは？」

尋常じゃない数の鯨の群れがこちらにやってきた。

「き、君どうするんだ？」

「あなたは船内に入ってしがみついて下さい。」

私に話しかけてきた混乱したハマさんに適当な指示を出して

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

私は両手に周を施した銃を持って片っ端から鯨を撃ち殺して徹底的に鯨掃除をした。

1時間後

町長や漁師達やバリー達や町の住民達は港を見て顎を外れるほど口を開けて驚いていた。

まあ当然だろう。港は目の前の海は

たくさんの鯨の死体が浮いていてその鯨の血で赤く染まっていたのだから

そして、3日後に無事に定期船が出せるようになった。

「いろいろとありがとうございました。」

「女や子供だからって馬鹿にして悪かったな。だが今度は負けないからな!!」

「君のおかげで助かったよ。」

「君は命の恩人だよ。」

「どういたしまして、じゃあ私はそろそろ行きますね。さようなら。」

見送りに来た人達に背を向けて私は定期船に乗りジャポンに向かった。

あと余談だが私が殲滅した鮫の群れはフカヒレ料理として

高級料理の素材として高値で取引されたそうである。

そして、その頃にチェリツシュがいる町からさらに南にある研究所で

「報告します。逃げ出したあの実験体はハンターに撃ち殺されたそうです。」

「ほう、あの鯨を銃でどうやって仕留めたのだ？」

「それはわかりませんでした。それでこの一件はどうしますか？」

「放っておけ。現在、我々の計画はそろそろ仕上げに入る。

そんなことに構っている暇はない。」

怪しげな者達が良からぬ計画を立てていることと

後にこの者達が起こす世界規模の大事件に巻き込まれることになることを

チェリッシュは想像もしていなかった。

### 36話 辻斬り

ここはジャポンのとある街のはずれ

この場には血まみれになって地に伏す人達と血で真っ赤に染まった刀を持つ男がいた。

「く、くくくくく」

ハア、ハツハツハーツ

これだ！！この刀さえあれば私は最強だ！！」

男は狂ったように笑いうつとりと刀を見ていた。

「ふー、ようやく着いた」。

ここがジャポンか・・・」

ジャポンの地に着いたチェリッシュは街の風景を見て懐かしく感じた。

ジャポンの街は和風ばかりな部分が混ざった普通の都会のような感じだった。

（元日本人の私にとっては居心地が良さそうな所ね。  
しばらくこの地でのんびりしようかな・・・）

「とりあえずお腹が空いたし昼食にしますか。」

私は懐かしみながら適当な飲食店を探すために歩き出した。

「さてとりあえず師匠から叩き込まれた心源流の道場に行ってみようかな。」

どんな所か興味あるし……」

チエリツシユはいつものように食事をしながら

今後の予定や目的地を考えていた。

「それにしても……」

チエリツシユは定食屋の窓の外を見て呟いた

窓の外にはアマチュアとはいえハンターらしき人がちらりほらりと見かけた

（なんかやけにハンターらしき人を見かける……  
まあ、私には関係ないことだと思うからどうでもいいか。）

私はあまり気にしないで食事を再開することにした。



「なんか・・・観光名所も私の所とほとんど変わらないや・・・」  
食事を終えたチェリッシュは町を歩き回って観光名所を見て回っていたが

あまり面白味がなかったのがっかりしていた。

「あ、そういえば宿はまだとっついていないから  
日が暮れる前にやっところう」と

私は宿泊する宿を探すために再び歩き始めた。

「すぐに宿をとることができてよかったよかった。」

あの後、チェリッシュは丁度いい宿を見つけて宿泊登録して

そして、今は銭湯で汗を流したので自分の部屋に向かっていたが

「ん、なんであの人がここに？」

その途中で見知った人を見つけた。

「ゴグさん久しぶりですね。」

「おう、チェリツシュじゃないか。久しぶりだな。」

「どうしてここにいるんですか？」

「なんだ？お前はあの辻斬り騒動関係で来たんじゃないのか？」

「辻斬り騒動？」

「その様子じゃ知らないでここに来たらしいな。」

「丁度いいや、ちょっと俺1人じゃ手に負えない仕事なんだ。手伝ってくれないか？」

その頃、チェリツシュ達がいる街の外れの墓場で

新たな辻斬り事件が起こっていた。

「血が血がまだ足りない・・・」

もつとたくさんの人を斬る必要があるなあ」

男は真っ赤に染まった刀を見て呟いた。

「あと次はもう少し強い奴だといいなあ・・・」

男はさつき斬殺したアマチュアハンター達の死体を見て

気持ち悪い笑みを浮かべて呟いてこの場から去っていった。

### 37話 念刀“刃鬼”

私は宿で食事をしながらゴグさんと仕事の話をしていた。

「最近この街を騒がせている1億ジェニーの賞金がかかっている辻斬りの捕縛・討伐とその辻斬りが持っている刀の回収・破壊ですか？」

「ああ、前者は辻斬りに殺された人の家族から

後者はその刀を元々所有していたこの国の忍流派の1つの葉隠流から盗まれたから頼むと依頼を受けたんだ。」

「なるほど・・・それでハンターらしき人達がこの街にたくさんいたわけですね。」

私はさつきから頭に浮かべていた疑問がわかり納得した。

「ああ、協専ハンターの方にも依頼が出ているみたいだからな。

まあ今ここに来ているのはほとんどがアマチュアで

多分、動いているプロハンターは俺達だけだと思っぜ。」

「それでも裏試験を終えたばかりルーキーのゴグさんでは大変な仕事なんじゃないでしょうか・・・」

「だからチェリッシュに手伝ってくれないかとお願いしてるのさ。いや〜一気に2つの依頼をこなして依頼2つ分の報酬と奴の賞金をゲットしようかと

思っ受けたんだが。想像以上にヤバイ仕事だと知ってどうしようと

困っていたら、偶然お前に会って良かったよ。当然、報酬は山分けだから、頼むよ。な？」

「はあ・・・1つ借りですからね。」

「おう、サンキュー」

じゃあ奴が辻斬りに使っている念刀“刃鬼”について説明するぜ。」

「念刀？妖刀じゃなくて」

「まあ。表向きでは妖刀なんだが、念能力者専用の刀だから念能力者の間では念刀と呼ばれているらしいぜ。」

詳しいことは知らないが神字という念を補助する力がある文字が刻んであつてな。」

それですごい力を発揮するそうだ。」

で、“刃鬼”についてなんだが過去の使い手はその刀でとんでもない数の人を斬ったせいだ。」

その人斬りの死者の念が取りついてな。」

それで“刃鬼”は抜いたらその念に当てられて人を斬ることに喜びを感じる殺人鬼と。」

化してしまうとつもなくヤバイ刀になったそうだ。」

「怖いですね・・・」

それで破壊してほしいという依頼を・・・」

「ああ、すでに一般人だけじゃなく俺が知る限りで10人以上もアマチュアハンターが。」

やられたみたいだな。また、お偉いさんの人も何人が殺されたからこれほどの賞金がかけられて、プロハンターの俺に依頼が回って来。」

「ただ。」

「そうですか……  
また新たな犠牲者が出る前に迅速にやらないといけませんね。」

「ああ、そうだな……  
ん、ちょっと失礼っ」と

ゴグさんの携帯が鳴りゴグさんは電話に出て、そして、緊張した顔になった。

「そうか……教えてくれてありがとな。」

ゴグさんは電話を切って携帯をしまった。

「何かあったんですか？」

「ああ、この街の知り合いの情報屋からだ。  
さつき徒党を組んで辻斬りを討伐に向かったアマチュアハンター連  
中20人の斬殺死体が  
この街の外れの墓場で発見されたんだとよ……」

「……これはひどいですね。」

「ああ、同感だな。」

私達は現場である墓場に来ていた。

墓場はいたる所は血で赤く染まっただけで凄惨としか言いようがなかった。

そのため、野次馬もこれを見て吐いたり顔を青くしてその場から去って行っていた。

（まあ、無理もないか。それにしても・・・）

「ゴグさん警察が来るのは遅いと思いませんか？」

「そういえばそうだな。いくらここが街の外れだからといってもちよつと遅いよな。」

私とゴグさんはそのことに疑問を持ち、同時に最悪な展開が頭に浮かんだ。

「ま、まさか！」「ま、まさか！」

そして、断末魔の悲鳴が聞こえた

「ぎゃああああー！！」

「ぐああああー！！」

「どうやら警察はここに向かう途中に辻斬りに遭遇して交戦しているみたいですね。」

「ちっ、急ぐぞー！！これ以上被害を出さないようにするために」

「脆いねえ〜。こんなんじゃ俺にかすり傷1つ付けられないねえ」

「く、くそ化け物め・・・」

私達が駆けつけるとそこは墓場と同じようにいたる所に死体が転がっ  
つていて

地獄と化しており、警察やアマチュアハンターの人達は恐怖で怯え  
ていた。

そして、彼らの視線の先にいるこの惨状を作り上げた白髪の男は  
壊れた笑みを浮かべて笑っていた。

「おい、ここは俺達に任せてあんたらは下がってる。」

ゴグさんは一番偉そうな警部らしきに話しかけた。

「な、なんだ？君達はそれはこっちの台詞だ！！」

「俺達はプロハンターだ。あとは俺達に任せてくれ。」



私とゴグさんはハンター証を見せて言った。

「わ、わかりました。お願いします・・・」

警部さんも自分達では奴には敵わないことやこれ以上やったら

さらに自分達に犠牲者が出るだけだとわかっているのか大人しく部下達を下がらせた。

「ん、どうやら君達は今までの雑魚とは一味違うようだねえ」

白髪の男は笑いながら私達を見て呟いた。

「じゃ・・・打ち合わせ通りにな。」

「ええ、わかりました。では行きます！」

ドンッ

ビュン

「ヒヤハハ

私にはそんな攻撃は通用しないよ」

様子見で一発念弾を放ったのだがあっさり斬り裂いてしまった。

（やはり一筋縄ではいかない相手のようですね。）

私は動きまくりながら念弾を撃ちまくった。

5分後、この場は私の念弾と奴の斬撃で滅茶苦茶になっていた。

私はまだ余裕があるとはいえ少々疲労が出てきていた。

「くくくくく、結構楽しかったよ・・・」

ではそろそろ死になさい。」

白髪男はさっきよりもかなり速いスピードで私に斬りかかって来た。

(今だ!!)

私は奴に念弾を放った。

「くく、私にはそれは通用しないと聞いたはず  
ぐおおああああ!!」

白髪男はチエリッシュが放った念弾を刀で斬り落そうとしたら吹っ  
飛んだ。

「複数の弾丸を一瞬で1箇所に撃ちこむスポットバースト・シヨッ  
トを喰らったら  
さすがのあなたもタダでは済まないでしょう。」

そして、白髪男は頭から血を流しながら立ち上がった。

「き、貴様。絶対に殺す・・・」

そして、血走った眼で私を睨みつけて斬りかかって来たが

「よし！！今だ！！」

グレイブううう！！」

ゴグさんは地面を操作する念能力の大地操術クライム・アース

で白髪男の足元を爆発させて空中に飛ばし、そして

「さすがのあなたも空中ではうまく避けることも防ぐことはできないでしょう？」

私は思いっきりオーラを波皇に込めて

ドオオオオオオオオン

特大の一撃を撃ち込み白髪男を“刃鬼”ごと粉碎した。

こうしてこの街を騒がせていた辻斬りは2人のプロハンターによって討伐された。

数日後

私はゴグさんは船着き場にいた。

「ふー、チェリツシユの協力のおかげで無事に依頼を達成できたぜ。ありがとな。」

「別にいいですよ。おかげで私もたくさん分け前もらったんですからでも次からはこんな無茶な依頼を受けないで下さいよ。」

「ああ、肝に銘じておくよ。」

「じゃあ俺はもう行くな！チェリツシユも気を付けるよ。」

「じゃーな！」

そう言ってゴグは豪快に笑いながら船に乗って去って行った。

「さて少し遠いですが心源流の道場がある街に行きますか。」

私は次の目的地に行くために歩き始めた。

### 37話 念刀“刃鬼”（後書き）

ゴ グレレイラル

操作系能力者

ク  
ラ  
イ  
ム  
・  
ア  
ー  
ス

大地操術

地面にオーラを流して操作することができる能力  
地面がコンクリートでも使用できる。

制約

長時間発動や広範囲にすればするほど消費オーラを大きくする  
ジャンプしたりして地面から離れると能力は強制解除される。

38話 心源流（前書き）

あのお爺さん再び登場

### 38話 心源流

「セイツ」

「ハアッ」

「へえ、気合入っていますね。」

私はこっさり離れた所から心源流道場の正拳突きや組手の修行をしている  
数百人も門下生達を観察していた。

「でも念能力者は見当たらないな・・・  
どこにいるのかな？」

「念は表に出せないからのう。  
じゃからこことは別の秘密の修行場で修行させとるよ。」

いきなり横から声が聞こえて驚いて振り向くとそこにハンター協会  
会長がいた。

「ネ、ネテロ会長！！  
なぜここに？」

「ワシは心源流の師範じゃぞ。  
門下生達の様子を見に来たんじゃよ。  
お主はなぜここに？」

「か、観光にこの国に来た際に心源流の道場がここにあることを思

い出して

せつかくだから見て行く」と思いまして・・・」

「ふむ、丁度ええわい。ちょっとワシの用事に付き合ってくれんかのう?」

ネテロは意地悪な笑みを見せて言った。

「は、はあ。わかりました。」

「ではついてきなさい。」

私は渋々と従い会長のあとについていった。

「あ、あの〜ネテロ会長・・・

彼らはいったい?」

私はネテロ会長と一緒に道場の地下に来たのだが、

目の前に念能力者の門下生達が会長と一緒にいる私を

観察するような目つきでジ〜と見ていた。

「ワシ等師範が集めた実力や人格に問題ない優秀な門下生達じゃよ。まあここにいる者はまだ裏試験を終えていないがの。」



そんなことを話していると門下生達の中から代表らしき青年が現れた。

「お久しぶりです。ネテロ会長

遠いところからはるばるご苦労様です。」

「うむ、修行は頑張っておるようじゃな。」

「ええ、皆毎日張り切って修行していますよ。」

そして、彼は私を見て

「そういえば、会長、

先程から気になっていたのですが、その娘は？」

「ああ、この娘はプロハンターじゃよ。

念能力者としてはじゃがお前らの先輩じゃな。」

「どうもチェリッシュといます。」

とりあえず私は挨拶した。

「僕はロイズといます。

よろしくお願いしますね。」

「じゃあお主らがどれだけ強くなったのか見るために稽古をつけて1人1人全員に模擬戦を試してみるかのう。」

「えー！！ネテロ師範とですか？」

「いんや。彼女とじゃよ。」

「はい……？」

会長は驚いた私を見て笑いながら言った。

「言うておくがこの娘は見た目に反して強いぞい。  
中堅ハンター級以上はあるかのう。」

(会長、私を過大評価しないでほしいんですが！！)

私は心の中で会長にツツコミを入れた。

「ほう……ではチエリツシュさん若輩者ですが、よろしくお願  
いしますね。」

「え、ええ……」

(な、なんかまた面倒なことになってきましたね……)

「ではまずはお主からじゃリングに上がりなさい。」

ネテロ会長がそう言うつと筋肉ムキムキの坊主男が現れた。

「では始め」

「ふんぬっつっつっつ」

開始直後に坊主男は練をして肉体を強化したが

（修行不足ですね。練に時間かかりすぎで

しかも時間かけた分無駄にオーラを消費していますね）

「はあああああ」

そして、私に正拳突きを放ってきたが

「ふんっ」

私はそれをあっさりとかわして硬をかけた右手で少し手加減して腹を殴り

「ぶほおおおおー!!」

坊主男はそのまま吹っ飛び壁に叩きつけられ気絶して担架で運ばれていった。

「次の前へ」

そして、次の相手はガツチリとした体格をした黒人だった。

「始め」

「このスピードを見切れるかな？」

そう言って彼は両足にオーラを集中させてスピードで私を翻弄しよ

うとしたが

「ふふふ、どうかな？私のスピードばああ…！」

速攻で見切って裏拳一発で沈めました。

そんな感じで私は門下生達をどんどん倒していった。

1時間後

（あゝ、体力はまだまだ余裕だけど精神的に疲れてきたな・・・）

「最後の者、前へ」

（あ、次で最後だ。ようやく終わりか。長かったわ。）

そして、やって来た門下生は

「そついえばあなたはまだでしたね。ロイズさん」

「ええ、お手柔らかにお願いしますねチェリッシュさん」

「始め」

「先手必勝！！拳砲！！」

彼はいきなり正拳突きをして飛ぶ拳撃の念弾を放ってきた。

「ほっと!!」

私はそれをとっさに体を捻ってかわした。

「へえ、良くかわしましたね。

ならこれはどうですか。

拳砲“連牙”」

ロイズはさっきの技を避けきれないほど連射して放ちチェリッシュユ  
がいた所に煙ができた。

トトトトトトトトトトトト

「はあ、はあ、どうですか？これだけやればいくらあなたでも・・・」

「私が何ですか？」

私は背後からロイズに話しかけた。

「な!!いつの間に後ろに？」

「あなたがあの技を連射した瞬間からですが。」

「な!!全く気付かなかった!!」

ロイズは眼を見開いて呟いた。

「それでまだやりますか？」

「・・・なんのまだまだですよ!!」

ロイズはまた拳砲を撃とうとしたが

「その技はまだまだ実戦不足ですが、鍛えればかなりのものになるでしょう。」

ですから頑張ってくださいね。」

「あぐっ」

そう言っつて私はまたロイズの背後に回っつて首に手刀を喰らわせて気絶させた。

「今日は僕達の稽古に付き合っつてくれてありがとっございました。」

「いえ、私もいい経験になりましたよ。皆さんも修行を頑張っつて下さいね。」

「ええ、今度お会いしたときにはとっつもなく強くなりあなたにリベンジする予定ですので覚悟しておいて下さいね。」

ロイズや門下生達は笑いながら言っつた。

「では私は行きますね。」

「お気を付けて。」

こうして私は心源流道場をあとにした。

あと余談であるが今回の稽古で門下生達はプロハンターとはいえず  
供の私に

簡単にやられたことに刺激されたせいかそれがきっかけで全員が  
今まで以上に真剣に修行に取り組み急成長していき

それを知ったネテロ会長は計算通りと呟いて笑っていたそうである。

### 38話 心源流（後書き）

皆さまのおかげでアクセスが10万越えしました。  
この小説を愛読して下さった皆さんありがとうございます。



39話 お宝が眠る村 前編

私はヨルビアン大陸のジャポンの真南に位置する港町に来ていた。

「さてと、食料等の物資の調達が済みまし、次の街に行きますか。」

そして、街から出て海沿いに西へと進んでいた。

「ふー、そろそろ昼食にしますか。」

のんびりと弁当を食べていると・・・

「うわあああ！！助けてくれええ！！！」

助けを呼ぶ声や悲鳴が聞こえた。

「ああ・・・、また、厄介事が起きる嫌な予感が・・・」

私は嫌々な顔をしながらその場に向かった。

絶で気配を消しながら来てみるとトラックに乗った行商人らしき人達が賊に囲まれていた。

(ふむ、遠くから狙撃で全員仕留めますか・・・)

私はどうやって賊達を倒すか決めて、すぐに行動に移した。

ドン

「な!!!リ、リーダー!!!」

私はまず彼らの頭を潰して混乱している隙に次々と狙撃して賊を倒していった。

209

10分後

「大丈夫ですか？」

私は賊を全員射殺して行商人の人達に近づいた。

「あ、ああ。おかげで助かったよ。ありがとう。」

行商人達の代表らしい屈強なおじさんが現れて礼を言った。

「いえ、たまたま通りかかっただけですから」

「いえいえ、それでも私達の命の恩人に変わりありませんよ。この近くに私達が住んでいる村がありますのでどうですか？」

「へえ、一家で行商人の生活をしているんですか。」

「ええ、さっきのようにたまたま賊に襲われたりと大変なことがありますけどね。」

でも、私達は他に稼ぐあてがないので・・・」

おじさんは少ししよんぼりしながら答えた。

「あ、あれがあなた達が住んでいる村ですか？」

私は視界の隅に見えてきた村を指差して言った。

「ええ、名もない小さな村ですが、のどかで良い所ですよ。」

「・・・おかしいですね。なんか静かじゃありませんか。」

「確かに変ですね？村に誰もいないですし」

村に入ると中はがらんとしていて不気味だった。

（でも気配はしますね。皆家の中に立てこもっているみたいですし  
少なくとも村にとって悪い意味で何かあったのは確かですね。）

チエリツシユはそんなことを考察しているとヨボヨボなお爺さんが  
杖について現れた。

「おお、ミゲル！！お前達か。」

はあ、なんとというタイミングが悪い時に帰って来たんじゃない・・・」

「村長！私達がない間にこの村に何かあったんですか？」

「うむ・・・とりあえず全員わしの家に来なさい。」

詳しい話はそこでしょう。」

「この村に隠された宝を100人以上で構成された盗賊が狙っている  
ですって！！」

「うむ、50年以上も昔の話で本人はすぐに病気でもう死んでおるが  
当時この村にギャンブル好きの遊び人のわしの先祖がいてのう。  
その人はとんでもない強運でギャンブルによって一攫千金を当てて  
数十億もの大金を手に入れたそうじゃ」

「す、数十億・・・」

「なるほど、さっきの賊はその宝を狙う連中の仲間でしょうね。」

「何！お前達はすでに奴らに襲われたのか？」

「ええ、死ぬ所でしたが、彼女に助けってもらって」

ミゲルは私を見て答えた。

「そうか・・・話を戻すぞ。」

で、わしの祖父から先祖代々この話を伝えていってこの宝を守ってきたんじゃないよ。

今では賊のせいでこの村の住人全員が知っていることじゃがな。」

そして、村長は私の方に顔を向けて

「それにしても、君は何者じゃ？」

簡単に銃を持った盗賊達を倒すとはお主はただ者ではないじゃろう？」

村長は少し疑うような目で私に何者が聞いてきた。

「はあ・・・私の正体については他言しないでくださいよ・・・」

「まさか君はプロハンターだったとはのう・・・」

「道理で強いわけだよ・・・」

私はハンター証を見せて自分はプロハンターだと説明し  
2人はなんとか納得してくれた。

「チエリツシユさん、これがそのお大金が入っている隠し預金通帳  
です。」

報酬はこれから払いますのでお願いです。

この村を救ってください。」

「はあ、あまり気が乗りませんが、わかりました。  
その依頼引き受けましょう。」

「ありがとうございます。すでに何人か犠牲者が出ていまして  
奴らはこの金を手に入れたら、おそらく私達を皆殺しにするでしょ  
うから

どうしようか困っていたのですよ。」

その頃、森の外れの廃墟で

「何！偵察に向かった奴らはやられただど！？」

「はい、全員頭を撃ち抜かれて死んでいました。」

「ちっ、どうやらあの村の連中は死にたいようだな。  
お前等！これから村に襲撃して皆殺しにしろ！！」

「宝はどうします？」

「あとで家探しでもして探す。  
行くぞ!！」

こうして村の隠し財産を巡って壮絶な戦いが始まるのだった。

## 40話 お宝が眠る村 後編

私は村長さん家で夕食をとっていると

「どつやら盗賊が来たようですね・・・」

私は低く呟いた。

「え・・・」

村長は呆然とした反応をした。

「すぐに村中の人達を一箇所に集めてここに避難させてください。  
私は賊をなんとかします。」

「は、はい。お願いします。」

村長は慌てながらも頷いた。

「ふう、皆私達を殺す気満々のようですね・・・」

家の外に出た私は襲撃して来た盗賊を見て呟いた。

「まあ、私がすることは変わりませんけどね。」



そう言っつて私は盗賊達に銃を向けた。

村の教会ここには村中の村人が避難していた。

「なあいくらプロハンターでもあの数が相手じゃヤバくねえか？」

「そうですねよ。元々はこの一件はこの村の問題であの娘は関係ないでしょ。」

避難していた村人達はいろいろと騒いでいた。そこに村長が

「うむ・・・そうじゃな。いくらなんでも子供1人に戦わせてわしらは避難するとは大人げないのう。」

「勇気があるものは行くぞ。この村を守るんじゃ！！」

そんな村長達が無駄な心配をしてる頃、チェリツシユは

「ぐええ！」

「次っ」

「ギャアアア！」

ドンドン ガガガガガ

「ふう、キリがないですね。」

銃を武装した100人近くの賊相手に無双していた。

「た、大変です！！ボス！！！」

「どうした？」

「わけのわからない小娘によって次々と仲間がやられています。」

「あん、女にそれも子供1人になに手こずってんだ！！！」

「そ、それがその小娘は無茶苦茶強いんでっ……」

部下の男は全てを言う前にドサリと倒れて地面に転がった。

「なんだ！！何が起こった!?!？」

盗賊団のボスは啞然とする。

そして、ドサドサドサと時間差で他の部下達も倒れていきこの場に立っているのはボスと



危ないから避難しているように言ったじゃないですか。」

チエリツシュが現れ、村人達はまた驚く。

「まあ、もう終わりましたからいいですけどね。」

彼女が片手で引きずって連れてきたボロ雑巾のようになった盗賊のボスを見て……

次の日、これから出発する私は村の人達から出迎えを受けていた

「村を救っていただいております。これはお礼です。」

村長はそう言って隠し財産が入った通帳をチエリツシュに渡した。

「ちよっ！！村の隠し財産を全部渡していいんですか？」

「いいんですよ。今回の件はこれのせいで起きたんですから  
ない方がいいですし、ワシ等では使い道がない金です。」

あなたなら有効活用してくれると思いますのでお渡ししますよ。」

「……………じゃあ、遠慮なくいただきますね。」

そう言って私は通帳を受け取り村をあとにした。

チエリツシュが去った方を見て村人達は呟いた。

「まったく、プロハンターというのは本当に凄いですねえ・・・」

「うむ、そうじゃのう・・・」

おっと、ついボーとしてしまったわい。さて皆仕事に戻るぞ。」

この後、この村は旅人の憩いの場として知られるようになり

この村の人達は幸せに暮らしたそうである。

40話 お宝が眠る村 後編（後書き）

次話から新章突入

41話 行方不明(前書き)

バイオソルジャー編スタート

ちょっとバイオハザード混ぜています。

## 41話 行方不明

私は今ヨルビアン大陸のヨークシンの真北に位置する街にいた。

この街に来た理由は単純でゴグさんに仕事の手伝いに呼ばれたためである。

それで今私はゴグさんと一緒にホテルの部屋で食事をしながら仕事の話をしていた。

「行方不明者の搜索依頼？」

ゴグさんは少女の顔が映っている写真を見せて

「ああ、この少女の親が家出したこの子を探してほしいという依頼を受けたんだ。

それで調査した結果、2ヶ月前を最後にこの付近で行方が分からなくなっ

た。でしかわからなかったんだが、同時に興味深い情報を見つけたんだ。」

「なんですかその情報って？」

「この少女だけじゃないんだよ。この辺りで行方不明になった人はそれも10人や20人じゃない。

ここ数年で俺がわかつているだけでも109人で

100人以上の人間がこの辺りで確認されたのを最後に行方不明に



なっている。」

「よく今まで騒ぎになりませんでしたね？」

「その行方不明になっているのはこの少女のような家出した者や流星街の連中や不法入国者等で行方不明になっても気にしない人達ばかりだから

誰も気づかなかつたのだらうな。」

「マフィアが関わっているとかじゃないですか？」

「俺もそう思つて調べたけど何も出てこなかつた。」

私は腕を組んで考え込み

「とりあえず、この人達を誘拐した犯人に気づかれないように慎重に調査する必要がありますね。」

「ああ、そうだな。」

また、厄介そうな依頼になりそうだな・・・」

「というか前回の辻斬り事件の一件の後にもうヤバイ依頼は受けな  
いでくださいと

私は言つたはずなんですが。」

私は冷ややかな目をしながらゴ　グに言った。

「いやいや俺も最初はただの行方不明者捜索するだけのはずだった  
のに

こんなことになるとは普通思わないだらうて！」

ゴグは慌てながら反論した。

「はあ・・・今回も一筋縄ではいかないかもしれませんね。」

私は重いため息をついた。

同時刻 チェリツシユ達がいる所から約10キロ離れた研究所

「フフフフ、ようやく完成しそうだな。

世界最強のソルジャーがな。」

「ええ、この力があれば世界最強でしょうねえ。」

スーツを着たしつかりとした体格の髭男とメガネをかけて少し背が低い白衣の男は

強化ガラスの向こうにいる10体以上の異形の存在を見て高らかに笑った。

「フフフ、あの馬鹿鮫が逃げ出すという失敗があったときはあせったが

計画は問題なくできそうだな。」

「ええ、そうですねえ。」

2人の男はそんな会話をしていると

「失礼します。バルドル様」

軍服を着た男が部屋に入って来た

「なんだ？なにかあったのか？」

髭男バルドルは軍服の男に訪ねた。

「はい、実は我々がこの5年間の間にさらった者達について調査している奴がいるようでした・・・」

「そうか・・・」

バルドルはしばらくその場で考え込み結論を出した。

「とりあえず今は放っておき、そいつが何者が調べること集中しろ。」

下手に手を出して面倒なことになったら困るからな。」

「わかりました。それでは失礼します。」

軍服の男はそう言って退室した。

「誰にも、誰にも私の野望は邪魔させんぞ・・・」

バルドルは誰にも聞こえない力がこもった低い声で呟いた。



#### 41話 行方不明（後書き）

このバルドルは念の存在は知りません。

少々世間知らず身の程知らずなのでこんなことをやらかしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3141z/>

---

GUNHUNTERGIRL

2012年1月11日01時53分発行